
日本ロシア文学会
第74回大会資料集

2024年10月26日（土）～10月27日（日）
創価大学

日本ロシア文学会

第74回(2024年度)定例総会・研究発表会は、来たる10月26日(土)、27日(日)の両日、創価大学にて、対面形式で開催されます。ハイフレックス方式は実施いたしませんので、ご了承ください。研究発表会では、25件の個別発表(A, B, C)、1件のワークショップ(W)が設けられます。ふるってご参加ください。

なお、配布資料類はGoogle Driveからダウンロードが可能です。Google Driveのリンクについては、後日ロシア文学会ホームページ(<http://yaar.jpn.org/>)及び、学会員メーリングリストによりご連絡いたします。

ご参加予定の方は、以下のURLまたはQRコードから、Googleフォームのアンケートに入ってください、10月9日(水)までに参加登録を行ってください。(ネームカードの準備、並びに懇親会の人数把握のため、できる限りアンケートへのご協力をお願いいたします。)

<https://forms.gle/p3PDKcTacnB8imM87>

対面参加事前申込用 Google Form の QR コード



日本ロシア文学会 2024 年度定例総会・研究発表会 (創価大学) タイムテーブル

| 10月26日(土) | | | | |
|---------------------------------|-------------|--------------------|-------------------------------|--------------------|
| 開会式 09:50-10:00 第1会場 (AC631 教室) | | | | |
| | | 第1会場 (AC631 教室) | 第2会場 (AC632 教室) | 第3会場 (AW608 教室) |
| 研究発表 | 10:05-10:40 | ブロック① A-I | ブロック② A/C-I | ブロック③ A-II |
| | 10:40-11:15 | | | |
| | 11:15-11:25 | 休憩 | | |
| | 11:25-12:00 | ブロック④ A/C-II | ブロック⑤ B-I | ブロック⑥ A/C-III |
| | 12:00-12:35 | | | |
| 昼食 | 12:35-13:50 | 昼食 理事会 (AW607) | | |
| 研究発表 | 13:50-14:25 | ブロック⑦ C-I | ブロック⑧ A-III | ブロック⑨ A-IV |
| | 14:25-15:00 | | | |
| | 15:00-15:35 | | | |
| 休憩 | 15:35-15:45 | | | |
| 大賞受賞記念講演 | 15:45-16:45 | 中央教育棟 (AB102) | | |
| 定例総会 | 16:50-18:10 | 中央教育棟 (AB102) | | |
| 懇親会 | 18:30-20:30 | ニュープリンスホール：大教室棟 1階 | | |
| 10月27日(日) | | | | |
| | | 第1会場 (AC631 教室) | 第2会場 (AC632 教室) | 第3会場 (AW608 教室) |
| 研究発表・ワーク ショップ | 10:00-10:35 | ブロック⑩ A-V | ブロック⑪ W-I (10:00-12:00) | ブロック⑫ A-VI |
| | 10:35-11:10 | | | |
| | 11:10-11:45 | | | |
| 各種委員会 | 11:50-13:00 | | | |

会場案内 (受付) 中央教育棟6階エスカレーター前(控室・書籍等展示) AC633, 634

プレシンポジウム

**言葉をつむぐ、言葉をつなぐ
—今、ロシア文学と向き合うということ—**

日時：2024年10月25日（金）18：30～20：30（対面のみ）

場所：創価大学八王子キャンパス 大教室棟（S棟）S202

一般公開・入場無料

（本シンポジウムは後日のオンライン配信の予定はありません）

ロシアには、それぞれの置かれた時代や状況において、それぞれの困難と格闘しながら言葉を紡いだ作家たちがいる。彼ら／彼女たちの営みに改めて目を向けること、そして、今という時代へその言葉をつなげるために私たちは何ができるのか？ 言葉を発し、伝えることがますます困難になっていく現代社会の中で、様々な立場からロシア文学と向き合う人々によるフォーラム。

● 高柳聡子「女性たちが拓く文学の未来」

ロシア文学者・翻訳者。著書に『埃だらけのすももを売ればよい』（書肆侃侃房）、『ロシアの女性誌——時代を映す女たち』（群像社）。訳書にダリヤ・セレンコ『女の子たちと公的機関：ロシアのフェミニストが目覚めるとき』（エトセトラブックス）など。

● 工藤順「たいしたことのないわたし（たち）がそれでもそれなりに文学と生きていくことの話」

1992年新潟生まれ。ロシア語翻訳労働者。訳書にプラトーフ『不死』（未知谷）、ワッサースタイン『ウクライナの小さな町』（作品社）など。石井優貴と共訳のプラトーフ『チェヴェンゲール』（作品社）で第9回日本翻訳大賞を受賞。詩と生活のzine「ゆめみるけんり」主宰。

ゲスト：藤枝大（書肆侃侃房） / 司会・コメンテーター：前田和泉（東京外国語大学）

第1日研究発表 10月26日(土)

| 第1会場(AC631 教室) | | | | |
|--------------------------------|-----|---------------------------------------|---|-------------------|
| ブロック・日時 | 番号 | 発表者 | 題目 | 司会者 |
| ブロック① 10月26日 10:05-11:15 | A01 | 沖 隼斗 ОКИ Хаято | 無謀な企て ボリス・ポブラフスキイとイリヤ・ズダネーヴィチ Покушение с негодными средствами: Борис Поплавский и Илья Зданевич | 三好 俊介 前田 和泉 |
| | A02 | 栗原 かおり КУРИХАРА Каори | マリナ・ツヴェターエワの詩集『別れ』における自己神話化の手法——連作詩「別れ」およびポエマ「赤い馬に乗って」の分析 Приём самомифологизации в книге стихов Марины Цветаевой «Разлука» — Анализ стихотворного цикла «Разлука» и поэмы «На красном коне» | |
| ブロック④ 10月26日 11:25-12:35 | C02 | 松元 晶 MATSUMOTO Akira | 「調和」するタシケント:「タシケント・テーマ」映画におけるタシケント表象 "Harmonizing" Tashkent: Representation of Tashkent in the Films of the 'Tashkent Theme' | 佐藤 千登勢 貝澤 哉 |
| | A06 | 宮 将仁 МИЯ Масахито | これから先何を書くべきか?: フォルマリズム・生産主義における労働とブイト “Что писать дальше?” Формализм и производственничество о труде и быте | |
| ブロック⑦ 10月26日 13:50-15:35 | C04 | 柚木 かおり YUNOKI-OIE Kaori | ウクライナのkobza文化における奏者ギルド:過去と現在 The Role of the Kobzar Guild In Traditional Kobza/Bandura Music Culture of Ukraine: Past and Present | 熊野谷 葉子 澤田 和彦 |
| | C05 | 一柳 富美子 HITOTSUYANAGI Fumiko | 戦後日本の学校教育におけるロシア・ソヴィエト音楽受容:鑑賞教材研究を通して The reception of Russian and Soviet music in postwar Japanese school education: A study of music appreciation materials | |
| | C06 | 宮崎 衣澄 МИЯДЗАКИ Идзуми | 明治期日本正教会の石版画アイコン Хромофотографическая икона в Японской православной церкви в период Мэйдзи | |
| 第2会場(AC632 教室) | | | | |
| ブロック・日時 | 番号 | 発表者 | 題目 | 司会者 |
| ブロック② 10月26日 10:05-11:15 | A03 | ЧИАН Чиех Хан 江杰翰 | «У тебя очень смешная рожа...»: Смех и нигилизм в драме Леонида Андреева «Савва» “You have a very funny face...”: Laughter and Nihilism in Leonid Andreev’s <i>Savva</i> | 野中 進 プロホロワ マリア |
| | C01 | ЛИТОВСКАЯ Елизавета リトフスカヤ エリザヴェータ | #Ruslit: Русская классика глазами пользователей соцсетей #Ruslit: Representation of Russian Literary Classics in social media | |
| ブロック⑤ 10月26日 11:25-12:35 | B01 | 光井 明日香 МИЦУИ Асука | 現代ロシア語における女性化名詞の使用をめぐって К вопросу об употреблении феминитивов в современном русском языке | 古賀 義頭 金子 百合子 |
| | B02 | 渡部 直也 WATABE Naoya | ウクライナ語の音声・音韻的バリエーション:学習・教育の観点から Phonetic and Phonological Variations in Ukrainian: from the Perspectives of Learning and Teaching | |

| ブロック・日時 | 番号 | 発表者 | 題目 | 司会者 |
|--------------------------------|-----|---------------------------------|---|--------------------------|
| ブロック⑧ 10月26日 13:50-15:35 | A08 | СЮН Цзун-Хуэй (セラフィマ) 熊宗慧 | Дискурсивная стратегия в манифестах акмеизма Discursive Strategy in the Manifestos of Acmeism | 武田 昭文 グレチュコ ヴァ レリー |
| | A09 | ЯНЬ Дин-цзя 鄢定嘉 | В поисках ключа к «Мирсконце» Велимира Хлебникова In Search of Key to Khlebnikov's play <i>Worldbackwards</i> | |
| | A10 | 金丸 駿 КАНЭМАРУ Сюн | ニコライ・ザボロツキ『ストルプツィ』における生理学的形象:ミ ハイル・ゼンケーヴィチの書評を手掛かりに Физиологические образы в «Столбцах» Н. Заболоцкого: в свете рецензии М. Зенкевича | |
| 第3会場(AW608 教室) | | | | |
| ブロック・日時 | 番号 | 発表者 | 題目 | 司会者 |
| ブロック③ 10月26日 10:05-11:15 | A04 | 上村 正之 UEMURA Masayuki | コトляレフスキー作『エネイダ』の後半部分とロシア文学の 接点——デカブリスト作家に注目して The Intersection between the Second Half of Kotlyarevsky's "Eneida" and Russian Literature: Focusing on the Decembrist Writers | 原 真咲 越野 剛 |
| | A05 | 大谷 梨乃 OTANI Rino | Ореш・Донченко『カラフト』におけるイデオロギーとナショナ リテイ Идеология и национальность в романе Олеся Донченко «Карафуго» | |
| ブロック⑥ 10月26日 11:25-12:35 | C03 | 高橋 沙奈美 ТАКАHASHI Sanami | 戦いを聖化する——ロシア・ウクライナ戦争と「市民宗教」とし ての正教会 Sacralize the War: Russo-Ukrainian War and Russian Orthodox Church as Civil Religion | 平松 潤奈 清水 俊行 |
| | A07 | 町田 航大 МАТИДА Кодай | ドストエフスキー「プーシキン演説」におけるリベラルなメシアニ ズム Либеральный мессианизм в «Пушкинской речи» Ф.М. Достоевского | |
| ブロック⑨ 10月26日 13:50-15:35 | A11 | 永田 怜絵 NAGATA Satoe | ドストエフスキー『弱い心』における心の描かれ方 How the Heart is Depicted in Dostoevsky's "The Weak Heart" | 齋須 直人 木寺 律子 |
| | A12 | 清水 真伍 СИМИДЗУ Синго | ドストエフスキーの芸術哲学における人間学的側面 Антропологический аспект в философии искусства Ф. М. Достоевского | |
| | A13 | 坂下 将人 САКАСИТА Масато | Ф.М.ドストエフスキー『悪霊』原題をめぐって:言語学のおよ び神学的考察 Интерпретация названия романа Ф. М. Достоевского «Бесы»: анализ с лингвистической и теологической точек зрения | |

第10回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

10月26日(土)15:45-16:45 創価大学 中央教育棟 AB102

| 受賞講演者 | 講演題目 |
|--|---|
| 亀山郁夫(ロシア文学者・名古屋外国語大学学長) КАМЭЯМА Икю | 「黙過」と想像力 ロシア文学との60年を回顧する "Попущение" и воображение |

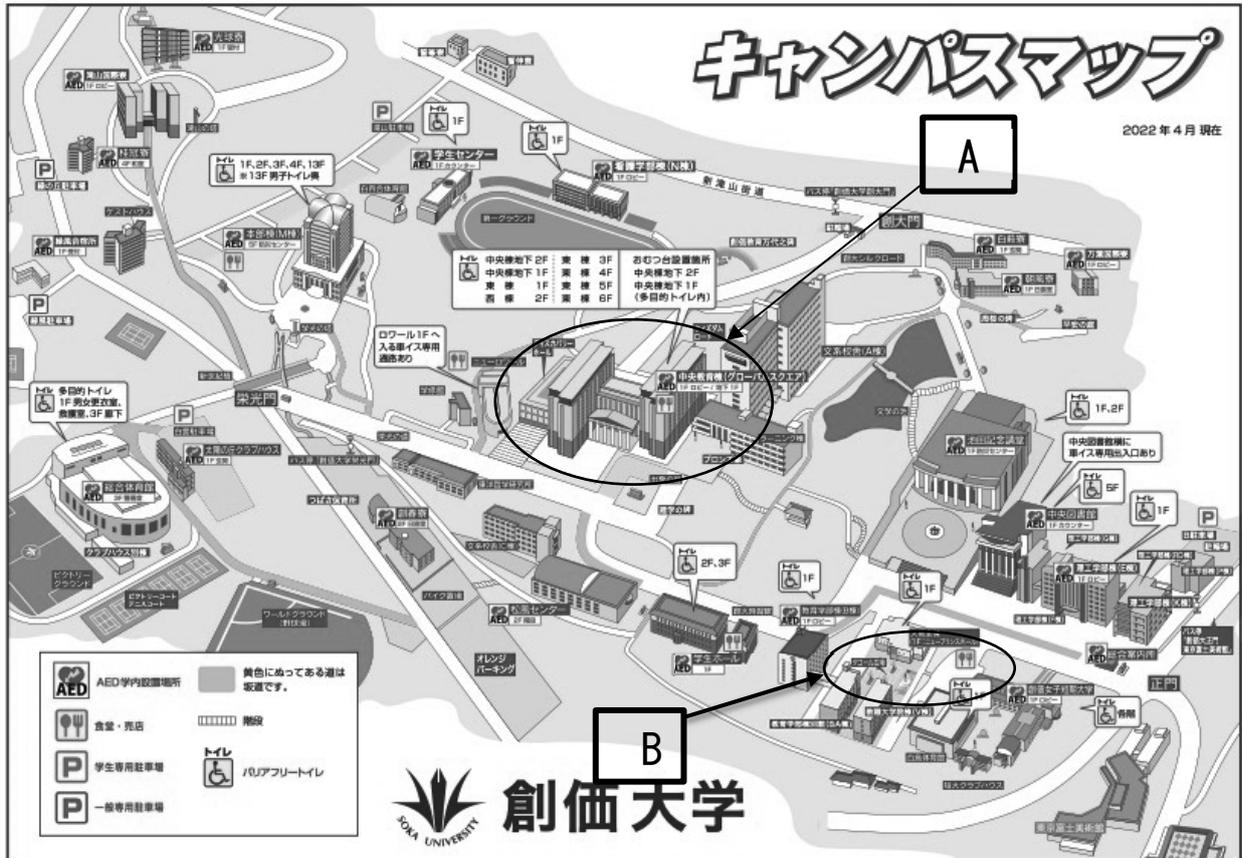
第2日研究発表 10月27日(日)

| 第1会場(AC631教室) | | | | |
|--------------------------------|-----|---|---|----------------------|
| ブロック・日時 | 番号 | 発表者 | 題目 | 司会者 |
| ブロック⑩ 10月27日 10:35-11:45 | A14 | 平嶋 寛大 ХИРАСИМА Кандай | Г. С. Сковорода『魂の静寂に関するプルタルコス』の解説 におけるキリスト教的価値観の反映 О христианских ценностях в «Толковании из Плутарха о тишине сердца» Г. С. Сковороды | 鳥山 祐介 伊東 一郎 |
| | A15 | 飯濱 碧輝 ИИХАМА Аоки | 哀歌における「時のはかなさ」のモチーフの発展から見たデルジャーヴィン「メシチェルスキイ公の死に寄せて」の文体の革新性 Новаторство стиля стихотворения Г. Р. Державина «На смерть князя Мещерского» в свете развития мотива скоротечности времени в элегии | |
| 第2会場(AC632教室) | | | | |
| ブロック・日時 | 番号 | 発表者 | 題目 | ファシリテーター/ コメンテーター |
| ブロック⑪ 10月27日 10:00-12:00 | W01 | 塚崎 今日子 ЦУКАДЗАКИ Кёко 熊野谷 葉子 КУМАНОЯ Ёко 山田 徹也 ЯМАДА Тэцуя | 現地調査資料に基づく伝承文化の総合的記述の試み:北ロシアフォークロア調査の事例より Попытка создания интегрированного описания традиционной культуры: на основе материалов исследований фольклора Русского Севера | 中堀 正洋 |
| 第3会場(AW608教室) | | | | |
| ブロック・日時 | 番号 | 発表者 | 題目 | 司会者 |
| ブロック⑫ 10月27日 10:00-11:10 | A16 | 李 博聞 ЛИ Бовэнь | アンネンスキーの詩学における「印象派的」な世界認識と「心理構成的」な詩作方法:手稿「詩人へ」を中心に «Импрессионистическое» мировосприятие и «психологично-конструктивный» метод в поэтике И. Ф. Анненского (на материале автографа «Поэту») | 斎藤 毅 宮川 絹代 |
| | A17 | 松山 勝哉 МАЦУЯМА Кацуя | A・クプリーンとИ・ブーニンの後期創作における「私」と「プロット」の問題について О вопросе «я» и «сюжет» в поздних произведениях А. Куприна и И. Бунина | |

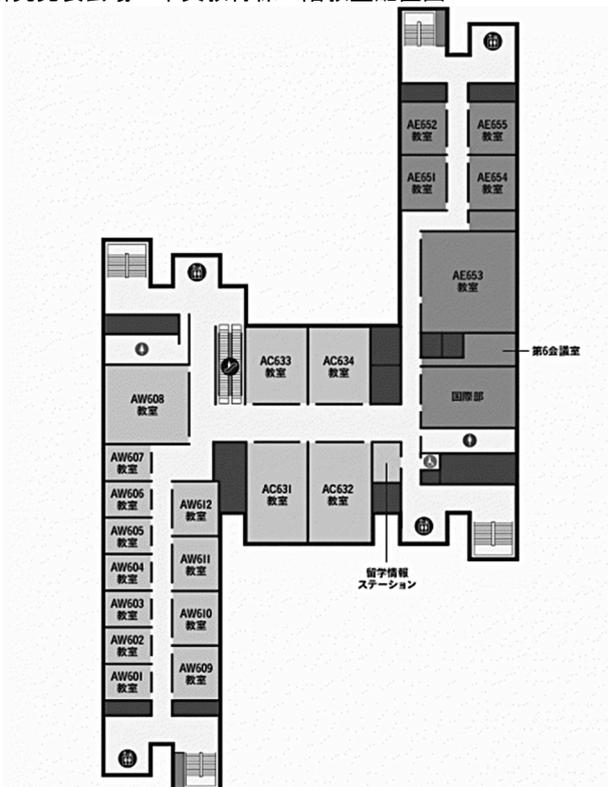
【会場案内】

- ◎ A 中央教育棟：第1～3会場、総会・大賞受賞記念講演
- ◎ B 大教室棟（S棟）：プレシンポジウム、懇親会

創価大学キャンパスマップ



研究発表会場：中央教育棟6階教室配置図



【会場説明】

- 〈受付〉
中央教育棟 6F エスカレーター横
- 〈控室・書籍等展示〉
中央教育棟 6F AC633, AC634
- 〈発表会場〉
第1会場中央教育棟 6F
AC631:開会式、ブロック①、④、⑦、⑩
AC632:ブロック②、⑤、⑧、⑪
AW608:ブロック③、⑥、⑨、⑫
- 〈大賞受賞記念講演〉
中央教育棟 B1F AB102 教室
- 〈定例総会〉
中央教育棟 B1F AB102 教室

【アクセス】

- ・ (バス) 創価大学へは、京王八王子駅を始発とし JR 八王子駅北口を経由する次の系統番号のバス (西東京バス) が運行しております。

[ひ04]創価大学循環 (ひよどり山トンネル経由)

[16号06]創価大学循環 (八日町経由)

[ひ02]創価大正門・東京富士美術館 (ひよどり山トンネル経由)

- ・ **研究発表会・総会会場の中央教育棟**へは、**創価大学循環** ([ひ04]および[16号06]) に乗車し、「**創価大学創大門**」で下車すると便利です。乗車後約23分→「**創価大学創大門**」停留所下車→徒歩約5分(創大門から真っ直ぐお進みください)。
- ・ **プレシンプジウム会場の大教室棟**へ近い停留所「**創価大正門・東京富士美術館**」には、**創価大学循環**、**創価大正門・東京富士美術館**行きのいずれからもアクセス可能です。乗車後約20分→「**創価大正門・東京富士美術館**」停留所下車 →創価大学正門から徒歩約7分。
- ・ なお、八日町経由は大回りの経路のため、ひよどり山トンネル経由の方が、早く到着致します。
 - JR八王子駅北口からバスにご乗車の際は、午前中から午後12時29分までは**14番乗り場**から発車しますが、午後12時30分以降は以下の乗り場からの発車となりますのでお気をつけ下さい。
 - 11番乗り場**：[16号06] 創価大学循環 (八日町経由)
 - 12番乗り場**：[ひ02] 創価大正門東京富士美術館 (ひよどり山トンネル経由)
 - [ひ04] 創価大学循環 (ひよどり山トンネル経由)
 - 京王八王子駅から来られる方は、中央改札を出て、すぐ右手にあるガラス扉を開け、右側の階段を上がっていくとバス乗り場があり、その一番奥の4番が創価大学行きの停留所です。
- ・ (タクシー) JR八王子から約14分。

【宿泊・昼食その他】

- ・ 宿泊先は各自ご手配ください。
- ・ 大学周辺には飲食店が大変少ないため、昼食をお取りになる際はコンビニやJR八王子駅近くの飲食店などの利用もご検討ください (土日は大学生協の食堂・購買は営業していません)。
- ・ 外来専用駐車場が手狭のため、自家用車でのご来学はご遠慮ください。
- ・ 新型コロナウイルス感染症は、令和5年5月8日から「5類感染症」に移行しているため、本大会でもマスクの着用義務などの特別な対策を行う予定はありません。ただし今後、事態に大きな変化があった場合には、学会ホームページ並びに、学会員メールリストにて通知いたします。
- ・ 創価大学のキャンパスは全面禁煙です。

懇親会のお知らせ (Банкет)

日時：10月26日(土) 18:30-20:30 (26 октября, сб, 18:30-20:30)

場所：ニュープリンスホール：創価大学大教室棟 (S棟) 1階

(New Prince Hall of Soka University, 1st Floor of Bldg. S.)

常勤職 (学振 PD 含む)：7,000 円 (для штатных преподавателей-членов ЯАР – 7,000 иен)

非常勤職：5,000 円 (для внештатных преподавателей-членов ЯАР – 5,000 иен)

大学院生：5,000 円 (для аспирантов-членов ЯАР – 5,000 иен)

国外参加非会員：8,000 円 (для зарубежных участников конференции – не членов ЯАР – 8,000 иен
включая регистрационный взнос)

支払い：当日受付にて・参加費込み (Способ оплаты: на стойке регистрации, наличный расчет)

☆ご出欠のお知らせを10月9日(水)までに Google フォームのアンケートにてご回答ください

(本資料集1ページ参照)。

日本ロシア文学会第74回研究発表会 報告要旨集

-
- A01 沖 隼斗 無謀な企て ボリス・ポプラフスキイとイリヤ・ズダネーヴィチ
- A02 栗原 かおり マリーナ・ツヴェターエワの詩集『別れ』における自己神話化の手法——連作詩「別れ」およびポエマ「赤い馬に乗って」の分析
- A03 ЧИАН Чих Хан «У тебя очень смешная рожа...»: Смех и нигилизм в драме Леонида Андреева «Савва»
- A04 上村 正之 コトリャレフスキイ作『エネイーダ』の後半部分とロシア文学の接点——デカブリスト作家に注目して
- A05 大谷 梨乃 オレシ・ドンチェンコ『カラフト』におけるイデオロギーとナショナリティ
- A06 宮 将仁 これから先何を書くべきか? : フォルマリズム・生産主義における労働とブイト
- A07 町田 航大 ドストエフスキイ「プーシキン演説」におけるリベラルなメシアニズム
- A08 СЮН Цзун-Хуэй Дискурсивная стратегия в манифестах акмеизма
(Серафима)
- A09 ЯНЬ Дин-цзя В поисках ключа к «Мирсконце» Велимира Хлебникова
- A10 金丸 駿 ニコライ・ザボロツキイ『ストルブツィ』における生理学的形象：ミハイル・ゼンケーヴィチの書評を手掛かりに
- A11 永田 怜絵 ドストエフスキイ『弱い心』における心の描かれ方
- A12 清水 真伍 ドストエフスキイの芸術哲学における人間学的側面
- A13 坂下 将人 Ф.М.ドストエフスキイ『悪霊』原題をめぐって：言語学および神学的考察
- A14 平嶋 寛大 Г. С.スコヴォロダー『魂の静寂に関するプルタルコス』におけるキリスト教的価値観の反映
- A15 飯濱 碧輝 哀歌における「時のはかなさ」のモチーフの発展から見たデルジャーヴィン「メシチェルスキイ公の死に寄せて」の文体の革新性
- A16 李 博聞 アンネンスキーの詩学における「印象派的」な世界認識と「心理構成的」な詩作方法：手稿「詩人へ」を中心に
- A17 松山 勝哉 А・クプリーンとИ・ブーニンの後期創作における「私」と「プロット」の問題について
- B01 光井 明日香 現代ロシア語における女性化名詞の使用をめぐって
- B02 渡部 直也 ウクライナ語の音声・音韻的バリエーション：学習・教育の観点から
- C01 ЛИТОВСКАЯ #Ruslit: Русская классика глазами пользователей соцсетей
Елизавета
- C02 松元 晶 「調和」するタシケント：「タシケント・テーマ」映画におけるタシケント表象
- C03 高橋 沙奈美 戦いを聖化する——ロシア・ウクライナ戦争と「市民宗教」としての正教会
- C04 柚木 かおり ウクライナのコブザ文化における奏者ギルド：過去と現在
- C05 一柳 富美子 戦後日本の学校教育におけるロシア・ソヴィエト音楽受容：鑑賞教材研究を通して
- C06 宮崎 衣澄 明治期日本正教会の石版画アイコン
- W01 現地調査資料に基づく伝承文化の総合的記述の試み：北ロシアフォークロア調査の事例より（塚崎今日子・熊野谷葉子・中堀正洋・山田徹也）
-

日本ロシア文学会

2024年10月

Abstracts of Research Papers Accepted for the 74th Annual Assembly of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature

-
- | | | |
|-----|---|---|
| A01 | ОКИ Хаято | Покушение с негодными средствами: Борис Поплавский и Илья Зданевич |
| A02 | КУРИХАРА Каори | Приём самомифологизации в книге стихов Марины Цветаевой «Разлука» — Анализ стихотворного цикла «Разлука» и поэмы «На красном коне» |
| A03 | ЧИАН Чиех Хан | «У тебя очень смешная рожа...»: Смех и нигилизм в драме Леонида Андреева «Савва» |
| A04 | UEMURA Masayuki | The Intersection between the Second Half of Kotlyarevsky's "Eneida" and Russian Literature: Focusing on the Decembrist Writers |
| A05 | ОТАНИ Рино | Идеология и национальность в романе Олеся Донченко «Карафуту» |
| A06 | МИЯ Масахито | “Что писать дальше?” Формализм и производственничество о труде и быте |
| A07 | МАТИДА Кодай | Либеральный мессианизм в «Пушкинской речи» Ф.М. Достоевского |
| A08 | СЮН Цзун-Хуэй (Серафима) | Дискурсивная стратегия в манифестах акмеизма |
| A09 | ЯНЬ Дин-цзя | В поисках ключа к «Мирсконце» Велимира Хлебникова |
| A10 | КАНЭМАРУ Сюн | Физиологические образы в «Столбцах» Н. Заболоцкого: в свете рецензии М. Зенкевича |
| A11 | NAGATA Satoe | How the Heart is Depicted in Dostoevsky's “The Weak Heart” |
| A12 | СИМИДЗУ Синго | Антропологический аспект в философии искусства Ф. М. Достоевского |
| A13 | САКАСИТА Масато | Интерпретация названия романа Ф. М. Достоевского «Бесы»: анализ с лингвистической и теологической точек зрения |
| A14 | ХИРАСИМА Кандай | О христианских ценностях в «Толковании из Плуларха о тишине сердца» Г. С. Сковороды |
| A15 | ИИХАМА Аоки | Новаторство стиля стихотворения Г. Р. Державина «На смерть князя Мещерского» в свете развития мотива скоротечности времени в элегии |
| A16 | ЛИ Бовэнь | «Импрессионистическое» мировосприятие и «психологично-конструктивный» метод в поэтике И. Ф. Анненского (на материале автографа «Поэту») |
| A17 | МАЦУЯМА Кацую | О вопросе «я» и «сюжет» в поздних произведениях А. Куприна и И. Бунина |
| B01 | МИЦУИ Асука | К вопросу об употреблении феминитивов в современном русском языке |
| B02 | WATABE Naoya | Phonetic and Phonological Variations in Ukrainian: from the Perspectives of Learning and Teaching |
| C01 | ЛИТОВСКАЯ Елизавета | #Ruslit: Русская классика глазами пользователей соцсетей |
| C02 | MATSUMOTO Akira | "Harmonizing" Tashkent: Representation of Tashkent in the Films of the 'Tashkent Theme' |
| C03 | ТАКАHASHI Sanami | Sacralize the War: Russo-Ukrainian War and Russian Orthodox Church as Civil Religion |
| C04 | YUNOKI-OIE Kaori | The Role of the Kobzar Guild In Traditional Kobza/Bandura Music Culture of Ukraine: Past and Present |
| C05 | НІТОТСУЯНАГИ Fumiko | The reception of Russian and Soviet music in postwar Japanese school education: A study of music appreciation materials |
| C06 | МИЯДЗАКИ Идзуми | Хромофотографическая икона в Японской православной церкви в период Мэйдзи |
| W01 | Попытка создания интегрированного описания традиционной культуры: на основе материалов исследований фольклора Русского Севера (ЦУКАДЗАКИ Кёко, КУМАНОВА Ёко, НАКАХОРИ Масахиро, ЯМАДА Тэцую) | |
-

JASRLL

October 2024

以下の研究報告要旨は著者に無断で
引用できない。
Not for quotation without the author's
agreement.

【A01】無謀な企て ボリス・ポプラフスキイとイリヤ・ズダネーヴィチ

沖 隼斗

本発表の目的はボリス・ポプラフスキイ（1903-1935）のイリヤ・ズダネーヴィチ（1894-1975）宛ての詩篇「無謀な企て Покушение с негодными средствами」の読解を通じて、ポプラフスキイのズダネーヴィチからの離反の原因、及びパリ亡命文壇接近以前のポプラフスキイ詩学の生成過程の一端を明らかにすることである。

ソネットの形式を厳格に守って書かれたこの詩篇は、獣／主人の主従関係が曖昧に表現されることで、執筆における自由と拘束の二律背反関係が描かれていると要約することができる。つまり、「無謀な企て」とは「詩を書く」という行為そのものことであり、ゆえにロシア未来派的な^{ザウミ}理知外言詩ではなく、このような因循な形式のソネットを未来派詩人ズダネーヴィチに宛てることは一種の反動である。

当時「無謀な企て」という言葉がポプラフスキイとズダネーヴィチの間でいわば合言葉のように使われていたことは、ズダネーヴィチのテキストからも明らかである。ただし、この言葉の意味合いは両者でわずかに異なっており、ズダネーヴィチの回想「ボリス・ポプラフスキイ」におけるそれは、あくまでズダネーヴィチの詩学内における^{ザウミ}理知外言詩の実験を指していると思しく、ポプラフスキイの亡命文壇への接近は彼がそのような意味での「無謀な企て」を捨てたからであるとズダネーヴィチは否定的に回想している。

だが詩篇中では書くことは生きることとも結び付けられており、「無謀な企て」＝「詩を書くこと」であるならば、ポプラフスキイにとっての「無謀な企て」は未来派や亡命文壇等の党派的枠組みに収まるものでなく、生と執筆の関係への問いを含んでいるのではないか。そしてそのような問いの追求がポプラフスキイをズダネーヴィチや未来派から離反させていく原因の一つとなり、1930年前後からのポプラフスキイのシンボリズム的、あるいはアクメイズム的傾向のある詩学へ転換させたと思われる。

(おき はやと、早稲田大学院生)

【A02】マリーナ・ツヴェターエワの詩集『別れ』における自己神話化の手法——連作詩「別れ」およびポエマ「赤い馬に乗って」の分析

栗原 かおり

本報告では、マリーナ・ツヴェターエワの詩集『別れ』(1922)を構成する二作品、連作詩「別れ」(1921)およびポエマ「赤い馬に乗って」(1921)(以下、「赤い馬」)について、自己神話化の手法に着目し、後年に執筆される叙事詩的ポエマの萌芽がみとめられることを指摘する。

ツヴェターエワの詩集は、一定期間に執筆された多数の作品を纏めたものが多いため、二作品のみで構成された『別れ』は特異な詩集といえる。ゆえに、『別れ』が総体としていかなる詩集であるかを論じることは、ツヴェターエワの創作史を考えるうえで重要であろう。

詩集の巻頭を飾るのは「別れ」であるが、執筆時期は「赤い馬」の方が半年ほど早い。ツヴェターエワのポエマは、中期頃までは概ね民話を下敷きに書かれているが、「赤い馬」は、たしかに民話的特性はみとめられるものの、特定の民話には拠らず、ツヴェターエワ独自の物語が展開されている。この点で、「赤い馬」はツヴェターエワのポエマとして異色であり、ポエマというジャンルを拡大している。また、主要な登場人物として赤い馬に乗った騎士が現れ、この騎士は「わたし」にとって詩女神の代わりとなった者だと語られる。したがって、詩人自身が物語の主人公としての「わたし」に投影されており、ここに自己神話化の手法を見出すことができる。

一方、「別れ」は八篇から成る連作詩であり、白軍兵として内戦に参加したまま音信不通となった夫セルゲイ・エフローンに捧げられている。連作全体を通してギリシア神話的モチーフが散見され、神話的世界が展開されている。なかでも、第四篇および第七篇にはゼウスが現れ、ガニメデーデス神話に準えてエフローンの戦死について語られる。その際、一人称の主語や動詞が排除されることで、語る主体としての「わたし」が透明化される。こうして「わたし」が神話的世界へと組み込まれ、自己神話化が達成されるのである。したがって、「別れ」は抒情詩でありながら、自己神話化の手法を通じて叙事詩的ポエマへと接近しており、「山のポエマ」「終わりのポエマ」など、抒情詩的テーマを扱うポエマの出現を予期させる。

以上のように、自己神話化の手法を通じて、「赤い馬」は民話的物語詩から叙事詩へ、「別れ」は抒情詩から叙事詩へと接近しており、詩集『別れ』は総体として、後年の叙事詩的ポエマへと至る過程の表出とみなすことができるだろう。

(くりはら かおり、早稲田大学院生)

【A03】 «У тебя очень смешная рожа...»: Смех и
нигилизм в драме Леонида Андреева «Савва»
ЧИАН Чихе Хан

Творчество Леонида Андреева может служить замечательной иллюстрацией утверждения испанского философа Х. Ортеги-и-Гассета о комической направленности, типичной для художественного мышления эпохи модерна. Несмотря на мрачный стиль и крайне пессимистическое настроение, свойственные произведениям Андреева, смех пронизывает почти все его тексты, а ирония выступает одной из важнейших доминант художественного мира писателя.

Доклад представляет собой попытку проанализировать поэтику комического в драме Андреева «Савва» (1906). Действие названной пьесы разворачивается вокруг трагической истории неудачного бунта главного героя против всего существующего миропорядка, а точнее, религиозных, общественных и культурных институций. Как одна из первых пьес, созданных Андреевым, «Савва» не только является значительным этапом творческих исканий начинающего драматурга, но и отражает взгляд автора на ряд волнующих его философских и социальных вопросов.

В докладе основное внимание будет уделено значению смеха и связанных с ним явлений, в том числе иронии, сарказма, и их функциям в драме «Савва». Будет изучена ключевая роль смеха в раскрытии взаимоотношений действующих лиц пьесы и выявлении их взглядов, а также будет указано, какое отношение имеют смеховые, игровые элементы к воплощению идейного содержания произведения и созданию особого его эмоционального фона. Существенно в этом плане и соотношение комического начала с такими темами, важными для осмысления позиции нигилизма и психологии бунтующего героя, как отрицанием и трансгрессией. Будет рассмотрена в контексте мировоззрения Андреева и ярко выраженная в драме своего рода «поэтика рож», которая в свое время была отмечена В.Ф. Ходасевичем и К.И. Чуковским. Указанное явление, как будет продемонстрировано, непосредственно связано с обнаружением экзистенциального кризиса человека и передачей ощущения общей катастрофичности мира, характерного для творчества Андреева в целом.

(江杰翰、国立政治大学)

【A04】 コトリャレフスキー作『エネイダ』の後
半部分とロシア文学の接点——デカбриスト作家
に注目して

上村 正之

本報告は、イヴァン・コトリャレフスキー (1769~1838) 作『エネイダ』(1798~)の後半部分を、ロシア文学史の背景を踏まえつつ考察するものである。『エネイダ』はウェルギリウスの叙事詩『アエネーイス』のパロディとして書かれた近代ウクライナ文学の嚆矢であり、全6部からなる。第1~3部は、1798年にペテルブルグで出版、第4部を加筆した版は1809年に同じくペテルブルグにて、第5,6部の抜粋は1821~22年に抜粋がデカбриストが主宰する文芸サークルの文集に発表され、完成版は作家の死後、1842年にハルキウにて出版された。

報告では、主に第4~6部に注目し、前半部分との登場人物の描かれ方の変化、特にパロディ的な喜劇性と、軍記ジャンルとしての「真面目な」要素の比重の変化に注目する。『エネイダ』の特徴は、ギリシャ・ローマの英雄がウクライナのザポロージェ・コサックに扮している点にあるが、もともと前半の1~3部は印刷を意図したものではなく、コトリャレフスキーの許可なく第三者が出版したものであった。そのため、作者自ら出版を意図した後半部分は、内容・思想に変化が生じる余地があった。

第5,6部を執筆した1820年前後の時期は、コトリャレフスキーがデカбриストの主宰する文学サークルの一員になった時期と重なっている。これらの時期の経験が、『エネイダ』の作風にどのような影響があったかを考察する。具体的には、作家と交流があったとされる Ф.Гринкаや、ルイレーエフといった作家のテキストに表れる思想・美学と、コトリャレフスキーを比較して論じる。これらのロシアの作家も、ウクライナを題材にした作品を書き、ときには自由思想をコサックに投影させていた。

コトリャレフスキーがデカбриストの作家と交流を持ったのは周知の事実であるが、両者のテキスト詳細に論じた研究は多くない。当時のウクライナやコサックについて、ウクライナ人およびロシア人がそれぞれどのような表象しえたかは、ソ連崩壊後から今日にいたる文脈の中で今一度検討されるべき問題であると思われる。

(うえむら まさゆき、北海道大学院生)

【A05】オレシ・ドンチェンコ『カラフト』におけるイデオロギーとナショナリティ

大谷 梨乃

ウクライナ生まれの作家、オレシ・ドンチェンコ (1902-1954) の『カラフト』(1940) は、ほぼ同時代の日本領樺太を舞台にした冒険小説である。北サハリンに向かった 17 歳のヴォロージヤとその父は、船の難破により樺太にたどり着く。日本人警官とロシア人通訳は彼らに日本国籍の取得と情報提供を促し、ヴォロージヤと父が断固として断ると監禁・厳しい尋問を始めた。ある日逃亡したヴォロージヤは、非道な実験を行う研究室の助手とされたり、スパイ船の乗組員となったりしたが、最終的には故郷に戻ることに成功する。この作品はセルゲイ・ミハルコフ (1913-2009) の『ミーシャ・コロリコフ』(1938) という詩をもとに書かれたとされるが、ドンチェンコはさらにその世界観を広げ、サハリン島内の様子や日本人をはじめとしたソ連以外の人々の言動や文化についても詳細に描いている。

ドンチェンコ自身が樺太を含めた日本の領土を訪れたという記録はない。しかしながら彼は、当時の樺太の様子や日本人らの文化・慣習を十分に取り入れて作品世界を創り出している。またこの作品には、日ソ間で敵対する人物関係だけではなく、労働者たちの国境を越えた結びつきも見られる。はるか遠くの〈異国〉である樺太の物語を、ドンチェンコはどのように描き出し、またそれをなぜウクライナ語で書いたのか。ドンチェンコが活動した時期のソ連・ウクライナの文学潮流や日本とのかかわりも視野に入れつつ、日ソ戦前夜の樺太の物語を読み解き、あらためて樺太をめぐるソ連と日本の関係性について文学作品から考える。

(おおたに りの、北海道大学院生)

【A06】これから先何を書くべきか？： フォルマリズム・生産主義における労働とブイト

宮 将仁

1920 年代にロシア・フォルマリズムが経験した理論的転回の中で、特に注目されるのは文学的系列にとって外在的な要素の歴史的役割が強調されたことだろう。しかし、フォルマリストの間ではこの文学外的な要素 (ブイト) の扱いは異なっている。Yu・トイニャーノフは文学的系列と外在的な要素の相関関係を「ブイトのことばの側面」に限定した (「文学の進化について」、1927 年)。一方で、B・エイヘンバウムが作家の職業的環境による被規定性として文学的系列とブイトの系列の関係を捉えた (「文学と文学のブイト」、1927 年) とすれば、V・シクロフスキは職業的環境を分析に含みつつも、階級的利害に基づく目的志向に収まらなかった作家としてトルストイを描き出している (『レフ・トルストイの小説『戦争と平和』における素材とスタイル』、1928 年)。

このようなブイトの観念の揺らぎは、「労働」に関わる問題として解釈できるだろう。シクロフスキが目的志向を否定し得たのは、作家業が「異化」のために他に「第二の職業」を求める (『作家業の技術』、1927 年) としても、作品の社会的機能は作者の意図 (あるいは階級的帰属) と合致しないと考えたからである。エイヘンバウムにとっても同様に、「文学労働」の形式が文学の進化を制約するとしても、階級性は「文学のブイト」における機能の中でのみ意味を持つものである。

このように、フォルマリストがブイトを文学史に組み込む上では、「労働」という契機が重要であった。その意味で、芸術と労働をともに社会を組織化する行為として捉えた生産主義者と、「第二の職業」が「第一の職業」と一致する「ファクトの文学」のプログラム (「同じことについて (コルホーズにおける作家)」、1929 年) を唱えた S・トレチャコフの存在は、ブイトに関する理論の生成を検討する上で見逃すことができないだろう。エイヘンバウムにとって、「これから先何を書くべきか？」という問いに答えるのが、「文学のブイト」と結びついた文学史の研究だったとすれば、生産主義者にとってもブイトの問題は「何のために (書くのか) ?」という問いと結びついていた。このように本発表は、「労働」と「ブイト」という視点から両者を比較することで、ロシア・フォルマリズムが 1920 年代に経験した文学史への転回を同時代の言説史のなかで捉えることを試みる。

(みや まさひと、東京大学院生)

【A07】ドストエフスキー「プーシキン演説」におけるリベラルなメシアニズム

町田 航大

1880年6月のプーシキン記念祭におけるドストエフスキーの演説は、プーシキンに体现された国民的性格としての、あらゆる民族性を自己の内に総合しうるロシア人の全人性と、この全人性によってヨーロッパの諸々の対立に和解をもたらすというロシアの使命を説き、聴衆を熱狂させた。一方、当時の批評や後世の研究は主に、ドストエフスキーが他民族への共感という普遍的資質をロシア人固有のものにし、その体现者とされる民衆への「跪拝」を肯定することで専制がはらむ社会問題を軽視したと批判して、この「演説」をドストエフスキーの偏狭な民族主義と反動性の表れとみなしている。

だがこれまでの研究では、「演説」のメシアニズム的内容の議論に終始し、作者がその言説を発信した意図を当時の社会的・政治的状况に即して検討することが十分になされていない。注目すべきは、ドストエフスキーにとってロシアの使命を語ることは、言論の自由にもとづく国民形成の具体的実践であったことである。農奴解放以来、ドストエフスキーはジャーナリズムに参与し続け、言論の自由の意義を擁護した。1870年代の彼の個人雑誌『作家の日記』では、自国民の使命について積極的に語ることが、未熟な国民が発展していくためには不可欠だとして、一人一人が臆せず語ることがを不特定多数の読者に推奨している。彼のこの姿勢はプーシキン記念祭の方針とも合致していた。企画・主催した当時のリベラル知識人は、記念祭を通じて、言論の自由を基盤とする新たな政治的主体としての自己を誇示し、反動と革命の両極に対抗しようとした。ドストエフスキーの「演説」のメシアニズムの言説も、このリベラルな方針に反するものではなく、自身の思想的立場から「リベラルな」議論を喚起する一種の言語行為なのである。

以上を踏まえ、本発表ではドストエフスキーの言論の自由に関する発言と、記念祭をめぐる当時の社会的・政治的状况を整理した上で、「プーシキン演説」とその前書き、批判者との論争を掲載した『作家の日記』1880年8月号を検討する。ロシアの反動的な自己賛美の代表例として批判的に扱われてきた「演説」を、反動化が加速する直前の、希望を有していた1870年代のロシア・リベラリズムの自己表明という文脈に照らして再考することで、この作家のメシア的理念がいかにか漸進的な社会改革の実際目的と結びついていたかを明らかにしたい。

(まちだ こうだい、早稲田大学院生)

【A08】 Дискурсивная стратегия в манифестах акмеизма

СЮН Цзун-Хуэй (Серафима)

Начало XX века было периодом крутых перемен в русской поэзии, когда одно за другим зарождались новые поэтические направления, воспользовавшись кризисом символизма, и акмеизм был одним из них. Будучи противниками символизма, два лидера акмеизма, Николай Гумилев и Сергей Городецкий, одновременно опубликовали в январском номере журнала «Аполлон» за 1913 год манифесты «Наследие символизма и акмеизм» и «Некоторые течения в современной русской поэзии» с резкой критикой символизма. Их действия вызвали в то время огромную негативную реакцию в литературных кругах. Тем не менее, зарождающееся поэтическое течение утвердило свое место в спектрах модернистского движения.

Манифесты акмеизма считаются вектором его литературного направления. Однако в конечном итоге он не достиг места назначения. В данной статье делается попытка рассмотреть манифесты акмеизма с точки зрения дискурсивной стратегии. Помимо двух упомянутых выше манифестов, объектом рассмотрения является также статья Мандельштама «Утро акмеизма», которая считается дополнительным манифестом акмеизма. Рассматривая эти три манифеста вместе, мы обнаруживаем, что они разделяли схожие дискурсивные стратегии – противостояние символизму, особенно идее Вячеслава Иванова, и принятие материального мира с его множественными репрезентативными явлениями. С этой точки зрения акмеисты фактически не отклонились от направления, данного манифестами.

(熊宗慧、国立台湾大学)

【A09】 В поисках ключа к «Мирсконце»
Велимира Хлебникова

Янь Дин-цзя

В маленькой пьесе русского футуриста Велимира Хлебникова «Мирсконца», которая была написана в 1912 году, содержится вся жизнь человека, только в обратном порядке. Она рассказывает о том, как 70-летний старик Поля сбежал из «собственных» похорон и с развитием хода сюжета становится вместе со своей супругой ребенком в детской коляске.

Сюжет пьесы Хлебникова напоминает фильм «Загадочная история Бенджамина Баттона», снятый по мотиву одноименного рассказа американского писателя Ф.С. Фицджеральда 1922 года, главный герой которого переживал физическую метаморфозу – родившись 70-летним стариком, он умер малышом. Такая ассоциация стимулирует докладчика поразмышлять следующие вопросы: 1) случайно ли совпадение обоих произведений в сюжете и с чем связано такое совпадение? 2) почему Хлебников называет пьесу «Мирсконца», в которой на самом деле изображена жизнь с конца? 3) как эта пьеса отражает миропонимание самого автора?

В данном докладе рассматривается временно-пространственную и глубокую структуры пьесы, затрагивается общее представление о времени в начале XX века и миропонимание самого Хлебникова. Докладчик пытается таким образом найти ключ к пониманию «Мирсконцы».

(鄢定嘉、国立政治大学)

【A10】 Николай・ザборовский 『ストルプツィ』
における生理学的形象：ミハイル・ゼンケーヴィチ
チの書評を手掛かりに

金丸 駿

本発表の目的は、詩人ニコライ・ザборовский (1903–1958) の第一詩集『ストルプツィ Столбцы』 (1929) における文体的特徴について、刊行当時の書評や同時代人の反応を検討しつつ、考察することである。多くの同時代書評では、プーシキンやフレーブニコフなどといった、先行世代の詩人からの影響が指摘されているのだが、そのような指摘の中でとりわけ注目すべきは、アクメイズムとの連関であろう。なぜなら、この連関はアクメイストであるミハイル・ゼンケーヴィチの『ストルプツィ』評において指摘されているからである。この書評は、当時すでに名前前の知れた実作者からなされたという点のみならず、アクメイストによってアクメイズムとの親近性を指摘されたという点で非常に興味深く、『ストルプツィ』の詩篇の読解とともに、初期ザборовскийの文学史的位置を考究する上でも、重要な参照項と考えられる。

ゼンケーヴィチはその書評の中で、「テーマはゾーシチェンコのそれに近い、極度に散文的なものであるにも係わらず、ザборовскийはサーシャ・チョールヌイ流の詩的ユーモアに墮することなく、『ア Riluiya Аллилуйя』や『肉体 Плоть』からのアクメイズムの系統を引き継ぎ、「画架に載せられた」抒情詩の高みを保っている」と述べており、『ストルプツィ』を高く評価するとともに、その詩篇をアクメイストであるヴラジーミル・ナールプトとの関係性の中で捉えている。

本発表では、ここに言及のあるナールプトの詩集に加え、ゼンケーヴィチの詩集『野生の紫衣 Дикая порфира』 (1912) も考察対象として、『ストルプツィ』の諸詩篇を読解するのだが、その読解に先立ち、そもそもこの二人のアクメイストがアクメイズムの中でも「左派」と称されるほど反美学的な傾向を有していた事実とその具体的な詩的傾向について取り上げる。その上で、二人の詩人に共通する、形象や詩行が有している重量や手触りといった、いわば物質性の問題を念頭に置きつつ、『ストルプツィ』における文体的特徴、特にその生理学的な形象を検討したい。

(かねまる しゅん、早稲田大学院生)

【A11】ドストエフスキー『弱い心』における心の描かれ方

永田 怜絵

本発表では、ドストエフスキーの初期短編作品『弱い心』(1848年発表)における心の描かれ方に焦点を当て、ドストエフスキー作品において描かれる過剰な感情が、どのようなメカニズムなのか、どのような効果をもっているのかを検証、考察したい。

『弱い心』において心と心臓の両方を意味する“сердце”を軸に着目し、心臓をはじめとする目に見えない臓器やその他の身体と、同様に目に見えない心との関係、言語、語りと心との関係が、言語のみの文芸作品において、どのように表現されているのかを分析する。

従来のドストエフスキー研究では、過激な情動に注目する際、登場人物の特性を無視することはできなかった。しかし、本発表では、各々の登場人物固有の性格や性質、その内面描写としての心を研究対象とするよりも、むしろ、心そのものを対象＝テーマにすることで、心を従来の個人主義的なものとしてではなく、集団的であり、相互依存的であり、気分や状況に左右されるうつろいやすいものとしてとらえることが可能である。ドストエフスキー作品に見られる過剰な感情を、従来考えられてきた個人主義的心理描写としてではなく、誰もが感じざるをえないような強い身体的な感情としてとらえることで、感情が個人のものであるのではなく、集団的なものであると示すことができる。

このことによって、ドストエフスキー作品に読者が巻き込まれる仕掛けを解き明かすことができると考える。

本発表は、情動という理性の反対と位置付けられたものが、文学研究においてどのような抑圧を受けているかを解き明かす試みである。そのような情動論的な戦略は、心を個人のものであるとして管理させようとする、諸システムへの抵抗になりうる。

(ながた さとえ、東京大学院生)

【A12】ドストエフスキーの芸術哲学における人間学的側面

清水 真伍

昨今、人工知能(AI)技術は急速な進歩を遂げつつある。アメリカのAI研究者レイ・カーツワイルは21世紀半ばにはAIが人間を超越するシンギュラリティ(技術的特異点)が到来すると予言し、注目を浴びた。あらゆる分野でAIが人間を凌駕する中で、合理性には還元されない人間の感性や自由な創造力に人間の存在意義を見出す言説がしばしば見られる。このような状況下において近年の美学思想研究では、美は合理性には還元されない自律的な価値であるとしたカントの美の無関心性説を前提に、芸術をはじめとする美の認識が人間を精神的にいかにかに自由にするのかが問われている。とりわけ、感性(美意識)を陶冶することで目的論的な関係付けから自律した「自由な主体」の確立を目指したドイツの詩人フリードリヒ・シラーの美学思想は其中で「自由の美学」などと呼ばれ、科学による人間疎外への危機感の中で再注目されている。

これまでもシラーの強い影響が指摘されてきたドストエフスキーの生きた19世紀ロシアもまた現代同様に自然科学が急速に発展し、チェルヌイシェフスキーの『哲学の人間学的原理』(1855)に象徴されるような人間の自由意志を否定する人間疎外的な機械論的人間観が流行するなど、人間のあり方が大きく変容しつつある時代だった。このような時代において過度な合理主義に反発したドストエフスキーの芸術観が述べられ、創作における「自由」の意義が強調されている社会評論『某氏と芸術の問題』(1861)は、人間の「自由」と「美」の関係という現代的観点から再評価することができるだろう。本報告では、『某氏と芸術の問題』において、ドストエフスキーがドイツの自律美学を受容しつつ、どのように19世紀ロシアの人間疎外的な合理主義と対峙したのかを検証する。

(しみず しんご、東京大学院生)

【A13】Ф.М.ドストエフスキー『悪霊』原題をめぐる：言語学および神学的考察

坂下 将人

本発表では主に『修士論文』の研究成果に基づき、『学士論文』において「天」、「天国」、「空」を意味する **небо** を用いて構築した『悪霊』の原題選定理由に関する仮説の「検証」を語学的・神学的に行う。

『学士論文』では「ドストエフスキーは『悪霊』の原題選定時、“небо”を念頭に置き、небоを“небог” (“небога”)、небеса であると「解釈」する方法で、「神」を意味する **бог** に「対立」し、「同義」となる「悪魔」が“бес”であると考えたからこそ、『悪霊』の原題に“бес”を選定した」と結論付け、『悪霊』の原題選定理由に関する仮説の「論証」を行った。

небоを“небог” (“небога”)、небеса であると「解釈」し、небо、небеса において **бог** と **бес** を「対置」・

「対比」させるためには **небо** は **не (нет) + бог (бога)**、небеса は **не (нет) + бес (беса)** として理解する必要がある。**небо** に対して語学的検証を試みた結果、небо (небеса) は古代ロシア語において「**ес** 語幹名詞」に区分され、“неб” (“небес”) を「語幹」とし、“неб” (“небес”) で区切れる語であるが故に、“не”では区切れない。従って、небо を **не (нет)** で区切る方法によって構築した『悪霊』の原題選定理由に関する仮説は語学的に「誤り」であった。

正教会は「神は遍在し、天にのみ存在するのではない」と定義し、「神の所在」(**небо**) の一つを「人間の心」に求めている。「いわば悪魔と神の戦いだ、そしてその戦場が人間の心なのだ」(ドストエフスキー、Ф.М. (米川正夫訳) 『カラマーゾフの兄弟』 第一巻 岩波書店 1957 p.226) からも明らかなように、正教徒であるドストエフスキーは正教会の教義に従って正教会と同じく「神の所在」(**небо**) の一つを「天」だけでなく、「人間の心」にも求めている。**небо** に対して神学的検証を試みた結果、「天に神は存在しない」として **небо** を **не (нет) + бог (бога)** であると考察する「解釈」は成立した。従って、небо を **не (нет)** で区切る方法によって構築した『悪霊』の原題選定理由に関する仮説は神学的に誤りではなかった。

(さかした まさと、日本大学)

【A14】Г. С. スコヴォロダー『魂の静寂に関するプルタルコス』におけるキリスト教的価値観の反映

平嶋 寛大

本研究発表では、Г. С. スコヴォロダーの著作における道徳の問題、とくに良心について検討する。善悪の判断基準となる良心を研究することは、18世紀ロシア文学における物語や登場人物で浮かび上がる価値の問題を明らかにすることにも接続する。

スコヴォロダーは『ナルキス』や『蛇の洪水』といった対話篇以外にも、いくつかの翻訳を書き残しており、そのうちの一つが『魂の静寂に関するプルタルコス』である。彼がこの翻訳を行ったのは、プルタルコスの思想がキリスト教の教えに近いと認識していたためであった。そのため、翻訳は逐語訳ではなく、宗教思想家であるスコヴォロダー自身の見解も織り交ぜられており、良心に関する彼の見解をうかがい知ることができる。

本研究発表でとくに注目するのは、プルタルコス『魂の静寂について』の19節からの翻訳である。この翻訳でスコヴォロダーは、良心を「我々の心における純粹さと純粹な行為の源」であり、「聖なる自尊心と冷静さを生み出し、心の目を永遠で最も甘美な記憶の鏡へと開き、この鏡の中で我々は確固たる希望をみる」ものであると定義づける。この良心が憤怒すれば苦々しい喪失や失望がもたらされるため、良心に従って自らの内面を反省することの必要性を説く。

この良心をスコヴォロダーは「内なる裁判官」(**внутренний судия твой**) とも呼ぶ。善悪の判断基準である良心によって自らの善を是認することで、人は誘惑に惑わされない静寂を得ることが可能となる。

そもそも、プルタルコスにとっての魂の静寂とは、個人が置かれた環境や能力を適切に把握したうえで、周囲と己の弱さゆえにもたらされる様々な情念に揺るがされない自制心を持ち、自らに相応しい幸運を甘受することである。そのため、世俗への執着や肉体の欲望といった空虚なものを看破する能力が求められる。

スコヴォロダーが、プルタルコスの『魂の静寂について』の中に見出したキリスト教の教えとは、まさに肉体ではなく心の平穩を何よりも説いた点にある。このとき、ローマやギリシャの哲学者やたとえ話をなるべく取り除き、当時のロシア人がより理解しやすい内容へと修正することで、スコヴォロダーは知ではなく、心の重要性をロシア人に向けて説いたのである。

(ひらしま かんたい、岡山大学・神戸大学)

【A15】哀歌における「時のはかなさ」のモチーフの発展から見たデルジャーヴィン「メシチェルスキイ公の死に寄せて」の文体の革新性

飯濱 碧輝

本発表の目的は 19 世紀初頭ロシアの哀歌における「時のはかなさ」のモチーフの発展を可能にした新しい表現の傾向を文体に見出すことである。18 世紀の哀歌では時などの抽象概念は主題を構成するモチーフとして発展しなかった。既に多くの研究者たちによって、18 世紀のホラティウス風頌詩で発展した「時のはかなさ」の主題が墓のモチーフと結びつき、ジュコーフスキイの詩「村の墓場」において哀歌に入り込んだことが論証されている。だが、そのことがロシア詩の詩学全般や哀歌の特質にどう関わっているのかということは明らかになっていない。なぜなら、モチーフを構成する手法の変化が「時のはかなさ」のモチーフの研究において検討されてこなかったためである。

この問題を解決するために本発表は文体、特に統語構造と音韻構造の分析を介して、「時のはかなさ」の主題を構成する諸々の抽象概念のモチーフとしての一連の発展が、感覚及び情緒の表現との統合によってもたらされていることを論証する。

「時のはかなさ」の主題はヘラスコフや彼の周辺の詩人たちのホラティウス風頌詩において人生と関わる側面を強め、人生の空しさ、さらには死のモチーフと結びついていった。だが、そこでは依然として時自体も、また、時とともに過ぎ去る事物も抽象概念として示され、具体的な人生や死とは結びついていなかった。デルジャーヴィンのホラティウス風頌詩において初めて、「時のはかなさ」の主題を構成する時や死の抽象概念が統語構造によって感覚と情緒に近づき、個別の人生や死と結びつき始める。1783 年に発表された詩「メシチェルスキイ公の死に寄せて」の修正版は、1779 年の初版に顕著に見られるこの傾向をさらに強めている。時、そして、時とともに過ぎ去る事物は視覚と聴覚によって物質的な形状や質感を与えられ、人生の空しさと死のモチーフは恐怖などの情緒を介して、故人の生前の回想や死後の姿の想像に結びついていく。

こうした感覚と情緒を伴う形象は具体的な空間に収まるものであり、18 世紀末の詩と散文において墓場や廃墟の空間と結びついていったが、「時のはかなさ」の主題は大部分、抽象概念の表象に依拠していた。頭語反復などの技法が感覚と情緒を統語と音の構造において前景化させることにより、19 世紀初頭の哀歌において時の働きや死の抽象概念が情緒と統合され、主題を構成するモチーフとして発展することになる。

(いいはま あおき、早稲田大学院生)

【A16】アンネンスキーの詩学における「印象派的」な世界認識と「心理構成的」な詩作方法：手稿「詩人へ」を中心に

李 博聞

本発表では、従来後期象徴主義の一員と見なされてきたロシア詩人イノケンティエー・アンネンスキー (И.Ф. Анненский, 1855-1909) の生前未発表の手稿「詩人へ Поэту」を取り上げ、改稿も含むそのテキストに反映されている世界認識と詩作の方法論を分析し、この詩が提示するテーマは先行研究における物と言葉の論争をめぐる「物と言葉の不可解」ではなく、創作における主体と客体の認識-現象の一致性にあると論じたい。

後期象徴主義の詩人ブリューソフはアンネンスキーの詩集『糸杉の匣』(1910) に対する書評において、アンネンスキーの文体を「極めて印象派的」と指摘し、彼が作中に表現したがるのは「今この瞬間」に彼が捉えた印象であると強調している。また、アクメイズムの代表的人物マンデリシタムはアンネンスキーの詩学を「心理的な構成主義」と評価し、それが 20 世紀ロシア詩における心理的方法の嚆矢と論じている。手稿「詩人へ」におけるアンネンスキー詩学の世界観と創作論を考察することで、この認識-現象の一致には、心理学と印象派的方法的な統一が反映されており、象徴主義の枠内に止まらないアンネンスキーの詩学の独自性と先駆性が示されていることを明らかにする。

発表は三つの部分から構成される。まずは、発表者による手稿の翻刻を説明し、アンネンスキーの評論と手紙を参照しつつ、テキストに言及されている重要な概念——〈我〉・〈非我〉・〈光線〉・〈物〉等を解釈する。次に、テキストに描かれている、光線による直接の視覚的な効果を強調し、言葉の遮断的な作用を批判するアンネンスキーの「印象派的」な世界認識を説明して、その「印象派的」な性質が客体である現象を主観的に「捕捉」する能力を意味することを明らかにする。最後に、テキストに提示されている、遮断されていない真実の詩 (поэзия) が詩人の創作を誘致することを説明し、媒介としての詩人が形体を「透明」にするという、外から内へ遡って内省する心理的な「構成」の方法を示唆することを示す。このような「印象派的」な世界認識と「心理構成的」な詩作の方法を通じて、アンネンスキーの詩学と象徴主義との根本的な違いを明らかにすることで、彼が若い詩人 (パステルナーク、アクメイスト) に、さらに 20 世紀ロシア詩全般に与えた影響に対する新たな視点を提供する。

(り はくぶん、京都大学院生)

【A17】A・クプリーンとИ・ブーニンの後期創作における「私」と「プロット」の問題について

松山 勝哉

A・クプリーン(1870-1938)とИ・ブーニン(1870-1953)は、両者共に1870年生まれの作家であり、1890年代から活発な作家活動を行うことになる。この発表では、この二人の作家の晩年の作品を対象に扱っている。

彼らの創作理念の根本には「私«я»」の問題がある。この「私」とは、固有性としての「私」である。固有なる「私」がこの世界を記述するというところに彼らの創作使命がある。だからこそ、両者にとって、固有なる「私」の「生«жизнь»」こそが、追求すべき主要な主題となるのである。

このような前提は、彼らの全創作活動において、基本的には一貫している。しかしながら、彼らにおける固有なる「私」の「生」の主題がより顕著な形で手法として現れるようになるのは、晩年の創作においてである。

両者は、1920年以降のパリ亡命時代において、晩年の主著となる長大な作品を発表している。クプリーンは1928-32年に『士官候補生』を執筆し、ブーニンは1927-29年、そして1933年に『アルセーニエフの人生』を執筆している。両作品からは様々な共通点を見出すことが可能だが、あまり語られることのない共通点として、作品の統一が、「プロット«сюжет»」によってではなく、「私」によって行われている、ということ挙げることができる。

このことを先駆的に指摘したのがВ・ホダセーヴィチ(1886-1939)である。彼はどちらの作品に対しても別個に批評文を書いているが、結果的に、両作品において「プロット」から「私」へと創作原理が移行していることを指摘している。

この発表では、創作原理としての「私」を、語り手の問題から分析している。『アルセーニエフの人生』は、主人公アルセーニエフ自身が語り手となって過去の「私」の「生」を一人称視点から語っている。この作品における語りを中心に「私」がいることは明瞭である。

一方、『士官候補生』は、三人称視点の語りによって構成されている。しかし、この三人称的な語り手は、作品全篇を通して主人公アレクサンドロフの視点からのみ語ろうとしている。やはり、この作品においても、語りを中心となるのは主人公の「私」なのである。

語りの人称が異なるという差異を見逃すことはできないが、『士官候補生』と『アルセーニエフの人生』の語りは、たしかに、主人公の「私」が語りの中心にあるという点では共通している。そして、このような共通点は、「私」や「私の生」といった、両作家の抱く創作理念から捉えても、理に合ったものである。

(まつやま かつや、神戸市外国語大学院生)

【B01】現代ロシア語における女性化名詞の使用をめぐって

光井 明日香

本発表では、現代ロシア語において студентка「女子学生」や преподавательница「女性講師」などの女性化名詞(феминитивы)がどのように使用されているのか、またその使用にはどのような要因が関係しているのかについて考察する。このような女性名詞について、Янко-Триницкая(1966: 178)などは、女性名詞のペアの存在する男性名詞を女性名詞に適用されることがあると指摘しており、врач「医師」などの男性名詞で女性を指示することのできる職業などを表す名詞と同じようなふるまいをする可能性を指摘している。

Первак(2020: 536)やЗахарчук(2021: 379)が指摘するように、最近特にインターネットなどにおいて女性を表す際に、блогерка「ブロガー」、авторка「著者」などの新しい女性化名詞の使用が頻繁に見られるようになった。Первак(2020: 536)は、この現象について、フェミニズムの発展に伴って現れ始めたとしている。Первак(2020: 536-537)によると、フェミニズムの支持者たちは、職業などを表す際に女性にも男性名詞を使用するというのは、女性を軽視していることにつながり、男女平等ではないと主張しているのである。さらに、Самойленко и Стекленева(2019)は、このような新しい女性化名詞だけではなく、учительница「女性教師」のような従来から存在する女性名詞もマスメディアでは積極的に用いられる傾向があるとしている。

しかし、筆者が2018年に行ったアンケート調査では、Он преподаватель, и она тоже преподаватель.「彼は講師で、彼女も講師だ」と女性に男性名詞を用いたものを選択した母語話者が125名中86名、Он преподаватель, и она тоже преподавательница.と女性に女性名詞化した女性名詞を用いたものを選択した母語話者が59名と、男性名詞を選ぶ傾向が強いという結果が出た。そこで、ロシア語ナショナルコーパスやインターネット上のニュース記事などを使って、女性化名詞がどのように使用されているのか、そしてその使用にはどのような要因が関係しているのかについて考察した。その結果、形態的な要因と意味的な要因が関係していることがわかった。

(みつい あすか、東京外国語大学)

【B02】ウクライナ語の音声・音韻的バリエーション：学習・教育の観点から

渡部 直也

本発表では、ウクライナ語における音声的・音韻的バリエーションについて、学習書や辞書での記述と比較しながら考察し、学習・教育への貢献を目指す。具体的には、(1) /v/の調音様式、(2) アポストロフィのついた唇子音の軟音性、(3) /ш/の単子音化の有無の3点に着目する。

(1)については、ロシア語と異なる[w]の発音と、ロシア語と近い[v]の発音とが提示されているが、音節末で前者の発音であることについては概ね一致しており、英語版ウィクショナリーでは位置によらず一貫して共鳴音（[w]または[u]）として表記されている。しかし同サイトや学習書の音声を含め、摩擦音の表出も広く観察され、後続の無声子音による無声化も見られる。ただし、ロシア語のような唇歯音ではなく両唇音である場合も多い。(2)については、アポストロフィによって音が「分離される」と一貫して記述されており、яなどによる軟音化はないとされている。しかしこれについても、ウィクショナリーや学習書の音声サンプルをはじめ、少なくとも軟音化した発音は広く観察される。(3)については、現代ロシア語のような[e:]への融合は生じず、二重子音[jj]との記述で一致しており、音声サンプルでも同様である。一方で公共放送のような「公的な」場面においても、実際の発話では融合した発音が観察されることも少なくない。

以上をまとめると、実際の発音は学習書や辞書の記述通りでないことも多い。確かに「どちらの発音もある」といった曖昧な記述は望ましくなくとも考えられるが、少なくとも提示されている音声と表記が一致していない状況は、混乱を招くため避けるべきである。また、上述の3点はいずれもロシア語との「差異」が関わる部分であり、結果的に「差異」を強調する記述が目立つと言える。昨今の情勢から「ロシア語離れ」が加速しているのは事実であるが、ロシア語との「類似」をロシア語からの「影響」だと安易に捉えるべきではなく、言語の実態と政治的・社会的状況とは本来独立させて考えるべきである。言語教育に対する提案として、少なくとも発音にゆれがあることを学習者に伝えることで、ウクライナ語の実態を正確に把握してもらうほか、言語や文化の背景について理解を深める機会を提供することが重要だと考える。

(わたべ なおや、東京大学)

【C01】#Ruslit: Русская классика глазами пользователей соцсетей
ЛИТОВСКАЯ Елизавета Владимировна

Русская литературная классика является значимой частью мирового культурного наследия, которая в той или иной своей ипостаси постоянно актуализируется в глобальном медиапространстве. Русская культура традиционно литературоцентрична и предполагает воспитание у новых поколений особого отношения к классическим художественным текстам: среднестатистический школьник знаком с рядом классических интерпретаций классических произведений и писательских биографий, способен на базовом уровне проанализировать ряд произведений и знает, что Пушкин – «наше все», а чтение русских романов – занятие очень сложное. В школе учат скорее восхищаться литературными текстами, а не свободно взаимодействовать с ними, превращая тексты в подобие музейных экспонатов, защищенных от любопытствующих стеклом и продвинутой системой сигнализации.

Демократизация высказывания стала отличительной чертой интернет-эпохи: блоги и социальные сети превратили каждого желающего в своеобразного медиума, который делится со своей аудиторией мыслями и опытом, в том числе, и читательским. Юные пользователи интернета (школьники и студенты) получили не только возможность высказаться, но и большое количество площадок, где можно было это сделать, – соцсети позволили им отправиться в (по терминологии Р. Барта) «читательское приключение» и стать равноправными со-авторами текста о тексте.

В рамках доклада мы хотели бы обсудить различные формы интерпретаций русской литературной классики, созданные непрофессиональными читателями, чтобы найти ответы на следующие вопросы: в чем видит важность классики нынешнее молодое поколение и какие приемы используют создатели контента для актуализации литературного материала. Это обсуждение видится особо важным в свете несмолкающего обсуждения кризиса литературоцентризма и кризиса чтения среди молодежи. При наличии исследований, посвященных читательским паттернам диджитал-поколения, остается практически не исследованной область интерпретации и актуализации литературного материала.

(リトフスカヤ エリザヴェータ、国立台湾大学)

【C02】「調和」するタシケント：「タシケント・テーマ」映画におけるタシケント表象

松元 晶

本報告は、1960年代に活躍したウズベク人映画監督アリ・ハムラーエフとエリョール・イシュムハメドフの映画作品を通じて、都市タシケントが政治的・文化的に重要な場所であったことを論じるものである。1960年代の中央アジア映画において、都市のイメージは特に重視されていた。特に都市タシケントはウズベク映画において重要な表象であり、ウズベク映画研究者のカリモヴァは、同時代のタシケントが舞台の作品を「タシケント・テーマ」と位置付けた。タシケント・テーマの映画は、タシケントの風景、人々、文化のイメージを通じて、ソ連のイデオロギーを補完し、更には民族文化を強調するものであった。したがって、タシケント・テーマの作品において、都市はイデオロギーと民族空間の両方があわさったイメージであり、このイメージはソ連中央が中央アジアに求めた姿を強調したものであった。一方でこうした期待された姿をベースとした都市表象は、ソ連中央によって押し付けられたものではなく、ウズベク映画人が積極的に描いたものであり、当時のタシケントが果たした役割と戦略をウズベク映画人の視点から考察する。

本報告では、ハムラーエフ及びイシュムハメドフ作品のタシケント表象に焦点を当て、具体的な作品として『私のズリフィヤはどこ？ (Где моя Зульфия? / Ёр-ёй)』、『優しさ (Нежность)』、『恋人たち (Влюблённые)』を分析する。これらの映画はラブコメディをベースにしており、明るい都市イメージが描かれている。1966年にタシケント大地震が発生し、街が壊滅的になったにもかかわらず、映画はタシケントを新しい空間として描き続け、タシケント・テーマを発展させた。タシケントが映画の舞台となった理由は、単に都市を映すというソ連全体の映画テーマに適していただけでなく、タシケントが外交的役割の一環として、多民族が調和する新しい空間を演出していたからだと考えられる。例えば1968年に開かれたタシケント国際映画祭は、現地のウズベク人だけでなくソ連が注目していたアジア・アフリカ諸国の映画人にとって重要な場となり、ソ連外交の一部としてタシケント映画祭は重視されていた。こうした外交的意義を含んだタシケント・テーマは、ウズベク人の民族アイデンティティを構築する一つの役割であったと考えられる。つまり、1960年代のタシケント・テーマは、ソ連のイデオロギーとウズベク人のアイデンティティが矛盾なく共存するテーマだったのだ。

(まつもと あきら、北海道大学院生)

【C03】戦いを聖化する——ロシア・ウクライナ戦争と「市民宗教」としての正教会

高橋 沙奈美

ロシア正教会はウクライナ侵攻を支持している。報告者はロシア正教会による戦争支持の言説を、この教会が現代ロシアにおける「市民宗教」として確立していく過程に他ならないと考える。本報告では「市民宗教」の要素として、市民の統合と既存の国家権力を聖化する機能に着目する。

多宗教／世俗国家ロシア連邦において、ロシア正教会は特別な地位を認められてはいるが、あくまで東方正教というキリスト教を信奉する一宗教団体である。そのような宗教団体が国民統合の象徴を気取ることは、むしろ遠心力としての力を働かせる恐れがある。そこで正教会は、ロシアの戦争、その記憶や軍事力を聖化することによって、特定の信仰や宗教性に依らない、愛国者のための「市民宗教」となることを目指してきたと考える。

こうした変化は一足飛びに生じたわけではなく、ソ連解体後のロシアにおいて段階的に進行していった。ロシア正教会の指導者は1990年代の経済混乱期に、(1)核産業と結びつくことによって、ロシアの愛国者、守護者としての自らの立ち位置を確立した。さらに、2010年代以降には(2)大祖国戦争の記憶を聖化することによって、受難や犠牲に増して勝利と正義を強調するという傾向を強めた。この時代には、「不死の連隊」のような新しい形の大祖国戦争の記念＝顕彰が急速に広まり、また同時に世界最大の犠牲を払ってファシズムを撃破したソ連(及びその後継国家ロシア)を西側世界は理解しないという、ロシア独自の「被害者意識ナショナリズム」が強まった。

ドンバス紛争とそれに続くロシア・ウクライナ戦争はロシア正教会にとっても、画期となる新しい試練であった。ウクライナ侵攻は歴史ではなく、現在進行形の戦争である。加えて、ウクライナは東スラヴ民族が東方正教を受け入れた歴史的故地である。ウクライナに対する侵略戦争を支持することは、ロシア正教会がウクライナにも配慮した旧ソ連圏の普遍的キリスト教東方正教であることを放棄し、現在のプーチンのロシアの理念「ロシア世界」を支える「市民宗教」であることを選び取ったに等しい。

本報告では、ロシア正教会の指導者の言説を中心に分析することで、ロシア・ウクライナ戦争の聖化の過程を明らかにし、それによってプーチンのロシアにおける「市民宗教」としてのロシア正教会の新たな役割と、それと引き換えに正教会が失ったものについて検討したい。

(たかはし さなみ、九州大学)

【C04】ウクライナのkobza文化における奏者ギルド：過去と現在

柚木 かおり

リュートとツィターを組み合わせた形状のウクライナの撥弦楽器kobzaとバンドウーラは、シェフチェンコの詩集『kobzaryal』によって日本でもよく知られている。2023年本学会第73回大会で報告したように、ウクライナ伝統文化においては、楽器が時代と共に形状と呼称を変え混在していたが、楽器の呼称が異なっても、伝統文化において奏者は一律にkobza奏者（単 kobzár、複 kobzari）と呼ばれていた。現在の定義では、棹の指板を押さえて音高を変える楽器がkobza、棹上で音高を変えないため指板がない楽器がバンドウーラとされる。本報告では現地の呼称を踏襲し、これら2つの楽器を用いる伝統音楽文化に関しては、「kobza文化」と称することとする。

kobzaの音楽文化に少し足を踏み入れるとすぐにギルド（kobzarskyi cex）の存在に行き当たり、その理解の必要性に気づく。それはkobza文化の伝統と規範を支えてきた機構であり、ギルド本部（在キーウ）のHPでは“об'єднання”、すなわち協会や連盟と説明されている。ウクライナでは芸術学者 K.П.チェレムシキーらがその歴史的機能に関する研究を進めているが、ウクライナ国外においてはその存在も研究も実質上紹介もされていない状態にある。

本報告では、①16世紀以来のギルドの歴史的機能と役割、②1930年代のソ連の政策によるkobza奏者およびその伝統文化迫害後、40年の「地下活動」を経て1970年代にkobza奏者 Г.К.トカチェンコによって復活したギルドの活動、③特に現在の活動状況、について明らかにする。資料としては、学術論文を含む日本でアクセス可能なウクライナ語の出版物、現ギルドのHPとYouTubeチャンネルなどの現地発信のウェブ資料、現ギルドのメンバーへの聞き取りを用いる。なお、現在は現地調査を行うことが非常に困難であるため、現状については可能な範囲での情報収集に留め、本報告自体を将来的な現地調査への足掛かりとしたい。

（ゆのき かおり、関西外国語大学）

【C05】戦後日本の学校教育におけるロシア・ソヴィエト音楽受容：鑑賞教材研究を通して

一柳 富美子

本報告は、発表者が継続的に行っている「日露音楽文化交流の具体的包括的研究」の一環であり、今回は日本の学校教育に注目して、戦後日本の教育現場でロシア音楽がどのように扱われてきたかを考察する。本発表の狙いはもう一つある。音楽メディアが未発達だった昭和20-30年代、西洋音楽を鑑賞する重要な場として、学校の音楽の授業は多大な役割を果たしていた。例えば、昭和24年度生まれから昭和42年度生まれの日本人の中には、プロコフィエフ作曲《ピーターと狼》を初めて聴いたのが学校の音楽の授業の時だった方が非常に多かったはずである。しかし今では、当たり前だった経験や常識が忘れられてしまい、プロコフィエフ専門の研究者でさえこの事実を知らなかった。世代間の引き継ぎの重要性を痛感した発表者は、かつて時代のカノンだった音楽の教科書を掘り起こして現代に伝える作業を始めた。この報告はその途中経過である。

発表者が取った方法は、都内の教科書図書館に保存されている昭和22年度からの小中高全出版社（小学校は昭和24年度から）の教科書実物を調査することである。音楽教科書の内容は、世相や西洋音楽受容の進展に敏感に反応しており、出版社の数の増減も時代を反映している。小学校音楽教科書の数が最も多かったのは第一次ベビーブームで子供人口が圧倒的に多かった昭和29年度使用（昭和28年5月検定通過）の13出版社22種類で、令和6年度の2出版社2種類とは比較にならない。

具体的な曲目については、今も昔もドイツ物が圧倒的に多く、特にバロックからウィーン古典派の作品が常に鑑賞教材の中心にあった。一方ロシア音楽は、特に昭和30年代前半までは不正確な情報が横行し、「ロシア民謡」という括りが安易に用いられていた。例えば、昭和23年度高校2年教科書では、「世の旅」と題して《赤いサラファン》が「ロシア民謡」扱いされており、昭和22年度高校1年教科書には、《アンダンテ・カンタービレ》が「旅の秋」という日本語歌詞付き唱歌に化けていた。小学校6年生に関しては、《ピーターと狼》後に《剣の舞》ブームが訪れ、その後にカバレーフスキイ組曲《道化師》推しの時代が続いた。平成26年度のプロコフィエフ《ロメオとジュリエット》を最後に、現行の6年生教科書にロシア物はなく、他方、中学3年生では、ずっと《展覧会の絵》が鑑賞推薦曲となっている。

（ひとつやなぎ ふみこ、昭和音楽大学）

【C06】明治期日本正教会の石版画アイコン

宮崎 衣澄

釧路正教会、白河正教会など、日本各地の正教会には明治期に制作された石版画アイコンが残っている。これら石版画アイコンは、これまで本格的な調査・研究の対象となっておらず、制作者や制作時期について明らかにされていない。その主な要因は、資料不足と、石版画に対する関心の低さである。日本正教会に関係する明治期の石版印刷については、岡村政子(1858-1936)が知られている。岡村政子は、亜使徒ニコライの援助を受けて工部美術学校に入学し、同窓であった山下りんを正教会に誘った人物である。岡村政子は夫の岡村竹四郎と明治15年石版印刷業社「信陽堂」を創業し、明治18年(1885)に『聖詠経』の扉絵を制作した。その他信陽堂は『普通小学画学楷梯』(1885)を刊行し、「石版技手人名鏡」(1885)に記載されるなど、当時東京における有力な石版印刷業社であったが、関東大震災に被災して多くの貴重な資料が失われた。

また、明治期日本正教会において、石版画アイコンはテンペラ画や油絵アイコンの代用品であった。明治14年(1881)日本正教会ではじめて石版画アイコン制作が試みられたが、その背景には、日本各地にできた正教会教会堂のためのアイコンが不足していたことがある。亜使徒ニコライは日本国内でアイコン画家を育ててアイコン工房を作る計画であったが、当時はロシアから送られたアイコンしかなく、日本正教会は常にアイコン不足に悩んでいた。石版画アイコンは、油絵やテンペラ画アイコンの代替のためのものであり、特に教会においては手書きのアイコンが十分にある場合には、石版画アイコンは用いられなかった。

しかし、現在日本正教会に保存される明治期の《四福音書記者》、《受胎告知》などの石版画アイコンは、日本における石版画黎明期における非常に質の高い多色石版画であり、正教会のみならず印刷史や美術史の上でも貴重な資料である。

本発表では、日本各地の正教会が保有する石版画アイコンの調査資料に加え、ロシアの美術館が所蔵する資料を基に、石版画アイコン《四福音書記者》、《受胎告知》、《世界球を持つキリスト》の制作者や制作時期の推定を行う。それによって、近年各地で文化財登録が進んでいる日本正教会の資料を歴史的に位置づけ、文化財保存の一助となることを目指す。

(みやざき いずみ、富山高等専門学校)

【W01】現地調査資料に基づく伝承文化の総合的記述の試み：北ロシアフォークロア調査の事例より

〔全体の趣旨〕

本ワークショップの報告者達は、アルハンゲリスク州上トイマ地区で1995年から現在まで5回にわたり日露合同のフォークロア調査を実施してきた。その間現地では、生活習慣の変化やインフォーマントの高齢化により、フォークロアの伝統が衰退の危機に直面し、このため日本人研究者のあいだでは、従来のような採録資料(音声、画像、動画)の現地機関との部分的共有にとどまらず、資料全体の完全デジタル化と目録化、すなわちデジタルアーカイブの構築と、伝承者自身や地域の人々への還元が必要であるという認識が生じた。また、個人情報等にも十分配慮しつつ、国内外の研究者が活用できる資料公開の必要性も、この地域のフォークロア伝統に長年関わってきた者の責任であり課題であると感じられた。そこで報告者達は、2015年前後より全資料のデジタル化とデジタルアーカイブの構築を進め、これを完成させて2019年には上トイマ地区側と共有した。さらには科学研究費助成事業「伝承文化の総合的記述の試み：北ロシアのフォークロア調査資料に基づいて」の成果物としての論文集『北ロシアの暮らしとフォークロア』の出版、これと関連するWebサイト「ВТАЯРФЭЭ (Верхнеготе́мский архив японско-русских фольклорно-этнографических экспедиций)」の構築に至った。今回のワークショップでは、こうした研究の流れと成果を改めて振り返るとともに、客観的な視点も加えて批判的に検討することで、今後の課題、目指すべき方向性についても明らかにしたい。

〔全体の構成と各発表の要旨〕

- I. 「アルハンゲリスク州上トイマ地区調査および科研について」
中堀 正洋 (創価大学)
- II. 「論文集『北ロシアの暮らしとフォークロア』およびWebサイト『ВТАЯРФЭЭ』について」
塚崎 今日子 (北海道科学大学)
- III. 話題提供
 - 1) 「チャストゥーシカ採録資料の記述と研究」
熊野谷 葉子 (慶應義塾大学)

20世紀末から21世紀初頭にかけて北ロシアの一地区で報告者らが採録したチャストゥーシカ約1000歌について、採録時のパフォーマンスを記録した動画資料および報告者が文字化した歌詞テキストと、インフォーマントの語り等から推測される往時のチャストゥーシカ演奏の様相とを照らし合わせ、かつて広範に歌われていたチャストゥーシカの膨大かつ多様なレパートリーのうち我々が何を記録しえたのかを報告する。口承文芸は共有する者の記憶と共に消滅する宿命を持つが、その

一端を記録し、記述し、保管する方法と、その結果生じた資料をどのように研究しうるかについて、話題を提供したいと思う。

2) 「語りのなかのシュリーギン」
塚崎 今日子 (北海道科学大学)

従来研究では、上トイマ地区におけるフォークロア調査で採録されたシュリーギン (一般的には「シュリクン」という名称で知られる) を取り上げ、その名称に関する先行研究を概観し、特徴を整理した上で、諸地域で見られる類似の存在や接点を持つ存在に注目して考察を行った。こうした作業を通して、ひとつの異界的存在においてさまざまな地域・民族間の影響が複雑に交錯していることを示すことができたと考える。一方、上トイマ地区で採録されたシュリーギンについて、自身で採録した資料 (音声、動画) に基づいて十分に検討したとは言い難いことに気づいた。そこで、本報告では、上トイマ地区におけるシュリーギンに関する語りを改めて取り上げてみたい。

3) 「民間信仰に対する認識の変遷について」
山田 徹也 (立教大学)

これまでの研究において発表者は、上トイマ地区の事例を元に民間信仰、特に家屋に棲むとされる妖怪信仰の現代における変容について論じてきた。ロシアの民間信仰は衰退してきているが、ただ一律に衰退し、消失していくのではなく、その過程にも相違点が見られる。こうした民間信仰の変容についてはすでに伝統的な民間信仰が衰退してきている日本民俗学において様々に論じられてきた。そこで本発表ではこれまでの日本の妖怪学の視点を元に上トイマ地区の民間信仰に対する人々の認識の変遷について考えていきたい。

日本ロシア文学会活動記録 (2023~2024)

1. 2023年度(第73回)大会

第73回定例総会・研究発表会は2023年10月21日(土)、10月22日(日)の両日、富山大学五福キャンパスで開催された。

これにともない理事会は10月21日(土)に、各種委員会は10月22日(日)に個別に開かれた。また日本ロシア文学会大賞授賞式が総会中に行われ、受賞記念講演録画はYouTube上で一般公開されている。また懇親会が、21日の午後ホテルグランテラス富山4階 瑞雲の間で行われた。

10月21日(土)

午前 開会式、研究発表会

午後 研究発表会、定例総会、懇親会

10月22日(日)

午前 研究発表会

2. 研究発表会内容

研究発表

第1会場

10月21日(土)午前(ブロック①)

〔司会〕大西 郁夫、坂庭 淳史

A01 西角 美咲:旅における人間関係—ルーシ人旅行者によるカトリック教徒への対抗意識と友好感情—

A02 深瀧 雄太:『左利き』における「交換」・「共同体」・「国家」

A03 笹山 啓:ロシアの右派思想家による国外の思想の読解について

10月21日(土)午前(ブロック③)

〔司会〕番場 俊、齋須 直人

A04 町田 航大:スラヴ問題をめぐるドストエフスキーとホミヤコフの対話:『作家の日記』における詩「鷲」の引喩を例に

A05 清水 真伍:ドストエフスキーの小説『白痴』における明暗の対立構造の分析

10月21日(土)午後(ブロック⑤)

〔司会〕越野 剛、中野 幸男

A07 栗生田 杏奈:ガルシンの『熊』に見られる熊表象の変容:アニマル・スタディーズの視座からの考察

A08 大谷 梨乃:戦争と人物表象—日ソ戦期の樺太を描いた文学作品を例に—

A09 堤 縁華:ズブブラグまでの距離:アクラム・アイリスリの創作における出郷と帰郷

10月22日(日)午前(ブロック⑧)

〔司会〕貝澤 哉、八木 君人

A13 李 博聞:パステルナーク「ペテルブルク」における4つの空間と「不可抗力」の隠喩

A14 岩間 成美:ブロッツキイにおける「海」と「目」の象徴性について

第2会場

10月21日(土)午前(ブロック②)

〔司会〕野中 進、本田 晃子

C10 一柳 富美子:ロシアに於ける音楽学研究の現在と日本の現状—ラフマーニノフ作品に於ける「Dies irae」引用問題を例に

C02 鈴木 佑也:《ソヴィエト宮殿》建築競技設計(1957)に至るまで:「建築家」としてのニキータ・フルシチョフ

10月21日(土)午前(ブロック④)

〔司会〕中澤 敦夫、堀口 大樹

B01 池澤 匠:戦時下ウクライナのSNSにおけるウクライナ語・ロシア語に関するメタ言語的言説

A06 塚田 力:『2023年古正教会カレンダー(ウクライナ古正教会)』にみる戦時下の古儀式派

10月21日(土)午後(ブロック⑥)

〔司会〕安達 大輔、古宮 路子

B02 БОРИСОВА Анна: Хронотоп М. М. Бахтина и его применение в прикладной лингвистике: Хронотопический анализ урока по русскому языку как иностранному

A10 ГРЕЧКО Валерий: Путевые очерки В. Шкловского: между приемом и фактографией

A11 САВРОВА Юлту: Геопоэтический символизм городов в историческом романе Зия Самеди "Тайна Годов": Перспектива уйгурского советского писателя

10月22日(日)午前(ブロック⑨)

〔司会・コーディネーター〕渡部 直也

W01 清沢 紫織、柚木 かおり、渡部 直也:ロシア周辺における現在の文化的状況について

第3会場

10月21日(土)午後(ブロック⑦)

〔司会〕長谷川 章、河村 彩

C03 佐藤 大雅:なぜ「シビア・スタイル」は再評価されているのか?:「シビア・スタイル」の近年の回顧(展)と受容

C04 松元 晶:「現代性」とは何か:1960年代中央アジアの宇宙表象

C05 横山 綾香:21世紀のリュビーモフと詩:『以前と以後(プリコラージュ)』(2003)を中心に

第9回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

10月21日(土)15:45-16:45 富山大学五福キャンパス共通教育棟C棟2FC21(11月2日より録画がYouTubeで公開中)

上田 洋子:インターネットはロシア文化のストリートである—ブッシー・ライオットから特別軍事作戦下の愛国的パフォーマンスまで

3. 総会議事録要旨(*詳細な総会報告は会報54号記載)

2023年10月21日(土)16:50-18:10

- (1) 開会の辞 会長:中村唯史(敬称略、以下同様)
- (2) 学会賞表彰 【論文部門】マリア・プロホロフ 【著書部門】鈴木佑也
- (3) 日本ロシア文学会大賞表彰
- (4) 若手ワークショップ企画賞表彰 「〈暴力〉から問う—19-20世紀ロシア文化における暴力表象の横断的検討」(代表者:田村太)
- (5) 議長団選出:阿出川修嘉(関東東北)、小椋彩(北海道)、斎藤慶子(関西中部)
- (6) 事務局報告
- (7) 各種委員会報告
- (8) ロシア語履修者アンケートについて
- (9) 2022/2023会計年度決算および会計監査報告
- (10) 2023/2024会計年度予算案
- (11) 声明発出に関する内規について
- (12) 2024年度全国大会について
- (13) 2023/2024年度役員・理事・各種委員一覧

(14) 議長団解任・閉会の辞 副会長：野中進

4. 会員異動（2023年8月～2024年7月）

ご逝去

浦雅春様、木村崇様、源貴志様
ご冥福をお祈りいたします

退会（以下、敬称略）

岩井憲幸（関東東北）、大石雅彦（関東東北）、
中村泰朗（関東東北）、西中村浩（関東東北）、
法木綾子（関東東北）、メーリニコワ・イリーナ
（関西中部）、山下万里子（関東東北）

入会（一般会員）

浅野智夫（あさの・としお）（関西中部）、
飯濱碧輝（いいはま・あおき）（関東東北）、
クラシナ・オリガ（くらしな・おりが）（関西中部）、
坂下将人（さかした・まさと）（関東東北）、
佃菜通子（つくだ・なつこ）（関西中部）、
松山勝哉（まつやま・かつや）（関西中部）、
三島朗萬（みしま・ろうまん）（関東東北）、
宮將仁（みや・まさひと）（関東東北）、
安井靖雄（やすい・やすお）（関東東北）、
横江智哉（よこえ・ともや）（関西中部）

入会（学生会員）

岡野優那（おかの・ゆうな）（関西中部）、
豊島愛子（とよしま・あいこ）（関東東北）

賛助会費納入

水声社、成文社、ナウカ・ジャパン、日ソ、
日本ロシア語情報図書館、ロシア旅行社

維持会費納入

諫早勇一、岩原宏子（2口）、国松夏紀、栗原成郎、
坂庭淳史（2口）、中村唯史（2口）、諸星和夫

日本ロシア文学会
2022/2023 会計年度決算報告(2022年9月1日～2023年8月31日)
2023/2024 会計年度予算案(2023年9月1日～2024年8月31日)
(2023年10月21日総会承認)

I 一般会計

| 収入の部 | 前年度予算 (2022/2023) | 前年度決算 (2022/2023) | 今年度予算 (2023/2024) | 備考 |
|-----------|----------------------|----------------------|----------------------|---------------|
| 前年度からの繰越金 | ¥8,639,859 | ¥8,639,859 | ¥8,532,911 | |
| 利息 | 16 | 14 | 15 | |
| 学会費 | 3,000,000 | 2,254,000 | 3,000,000 | |
| 入会金 | 10,000 | 15,000 | 10,000 | |
| 賛助会費 | 100,000 | 70,000 | 100,000 | |
| 雑収入(広告) | 20,000 | 10,000 | 20,000 | |
| 特別収入 | 0 | 100,000 | 0 | 繰越金を除いた今年度収入: |
| 合計 | ¥11,769,875 | ¥10,998,873 | ¥11,662,926 | ¥3,130,015 |

| 支出の部 | 前年度予算 (2022/2023) | 前年度決算 (2022/2023) | 今年度予算 (2023/2024) | 備考 |
|-----------|----------------------|----------------------|----------------------|--------------------|
| 大会準備費 | ¥400,000 | ¥211,019 | ¥400,000 | 富山大学大会 |
| 学会誌制作費 | 950,000 | 556,312 | 950,000 | 前年度と同額 |
| 交通費 | 500,000 | 592,945 | 700,000 | |
| 事務委託料 | 670,000 | 614,258 | 730,000 | シクミネット・勝美印刷併用 |
| 事務費 | 20,000 | 21,409 | 20,000 | 会報印刷・郵送代 |
| 広報委員会 | 16,000 | 15,714 | 50,000 | サーバーレンタル・管理謝金 |
| マプリヤール会費 | 29,000 | 0 | 60,000 | US\$1=¥150 想定、2年度分 |
| JCREES 会費 | 30,000 | 30,000 | 30,000 | |
| 学会賞・大賞 | 80,000 | 103,090 | 100,000 | 学会賞2名、大賞1名 |
| 通信費 | 15,000 | 11,932 | 15,000 | |
| 印刷費 | 260,000 | 190,123 | 200,000 | 大会資料集印刷代 |
| 会合費 | 2,000 | 0 | 2,000 | |
| 事業費 | 50,000 | 60,000 | 50,000 | |
| シクミネット手数料 | 0 | 59,160 | 60,000 | |
| (小計) | 3,022,000 | 2,465,962 | 3,367,000 | |
| 予備費 | 8,747,875 | 0 | 8,295,926 | |
| 次年度への繰越金 | | 8,532,911 | | |
| 合計 | ¥11,769,875 | ¥10,998,873 | ¥11,662,926 | |

II 特別会計

| 収入の部 | 前年度予算 (2022/2023) | 前年度決算 (2022/2023) | 今年度予算 (2023/2024) | 備考 |
|-----------|----------------------|----------------------|----------------------|----|
| 前年度からの繰越金 | ¥3,034,125 | ¥3,034,125 | ¥2,984,125 | |
| 維持会費 | 200,000 | 90,000 | 100,000 | |
| 合計 | ¥3,234,125 | ¥3,124,125 | ¥3,084,125 | |

| 支出の部 | 前年度予算 (2022/2023) | 前年度決算 (2022/2023) | 今年度予算 (2023/2024) | 備考 |
|-----------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------|
| 事業費 | ¥250,000 | ¥100,000 | ¥250,000 | 国際交流・若手ワークショップ |
| 学会参加者旅費補助 | 40,000 | 40,000 | 80,000 | 第72回大会実績 |
| 小計 | 290,000 | 140,000 | 330,000 | |
| 予備費 | 2,944,125 | 0 | 2,754,125 | |
| 次年度への繰越金 | | 2,984,125 | | |
| 合計 | ¥3,234,125 | ¥3,124,125 | ¥3,084,125 | |

2023年監査報告 監事：村田真一（9月30日）、寒河江光徳（10月8日）

委員会活動記録

■ 日本ロシア文学会大賞選考委員会

野中 進

今年度の大賞選考の経緯については、2023年12月末時点で1件の推薦があった。本年3月6日、オンラインで大賞選考委員会を開催し、大賞候補者として亀山郁夫氏（名古屋外国語大学学長、東京外国語大学名誉教授）を推薦することを決めた。委員会案は7月21日の理事会でも全会一致で承認された。選考理由については『ロシア語ロシア文学研究』56号をご覧ください。亀山氏による大会受賞記念講演は今年の全国大会（於創価大学）で行われる。なお、委員会では大賞候補者の推薦期間、推薦方法に関する改定案を策定し、理事会で承認された。今年度の総会で審議予定である。

■ 学会賞選考委員会

安達 大輔

学会賞選考委員会は2023年12月から2024年7月にかけて選考作業を行った。2024年7月7日にZoom meetingにて選考委員会を開催し、審議の結果、著書部門は安野直『ロシア文学とセクシュアリティ：二十世紀初頭の女性向け大衆小説を読む』（群像社、2022年10月）、論文部門は堤縁華「故郷が故国になる／ならないとき：アゼルバイジャンの元人民作家アクラム・アイリスリの位置づけ」（『ロシア語ロシア文学研究』第55号）、選考委員特別賞を高橋沙奈美『迷えるウクライナ：宗教をめぐるロシアとのもう一つの戦い』（扶桑社、2023年5月）にそれぞれ授賞することを決定した。選考過程、授賞理由などについて、詳しくは『ロシア語ロシア文学研究』第56号を参照されたい。

■ 学会誌編集委員会

平松 潤奈

『ロシア語ロシア文学研究』56号（2024年10月刊行予定）の編集作業は、現在のところ順調に進んでいる。学会誌55号については、23年12月に論文と書評をJ-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/yaar/list/-char/ja>)で、23年4月には55号全体を学会ホームページ上で公開した。56号についても刊行後、同様のスケジュールでの公開を予定している。編集作業にご協力いただいている多くの学会員の方々に、心よりお礼申し上げます。

■ 広報委員会

本田 晃子

広報委員会では学会ホームページおよび学会メーリングリストの管理・運営を行っています。ホームページについては、直近1年間で約99件（前年度126件）の更新を行いました。メーリングリストによる学会からのお知らせについては、直近1年間で約103件（前年度135件）の配信を行いました。引き続き、ホームページについてのご意見・ご要望がありましたら、広報委員会までお知らせください。ご協力の程、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

■ 国際交流委員会

武田 昭文

1. 「国際学会等での報告に関する助成」と「公開研究会・(ミニ)シンポジウム等の実施に関する助成」について、今年度の案内が委員会の不注意により公示されなかつたため、次年度において2年分募集を行うこととなった。

2. 「国際参加枠」による海外からの報告者の申請を6月24日締切として募集した。今年度は4名の応募者があり採用となった。

3. 海外で開かれる国際学会・シンポジウム・セミナー等の情報について、国際交流委員会もしくは広報委員会までお知らせください。

■ 社会連携委員会

鴻野 わか菜

社会連携委員会では、JCREES スラブ・ユーラシア研究サマースクール（2024年8月28日-29日 主催：JCREES、共催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）の企画選考に関わりました。本サマースクールには、例年、JCREES 加盟学会より1名ずつ講師を派遣しています。今年は本田晃子先生が講師を、小椋彩先生が企画選考委員をお引き受けくださいました。

また、2023年度日本ロシア文学会公開講演会として、3月9日に以下の動画の公開を行いました。

趣旨説明 中村唯史会長

「神西清とロシア：北京ロシア居留地の記憶」 講師：畔柳千明

「今、ロシア・モダニズム小説と向き合って：ユーリー・オレーシャ『羨望』を中心に」 講師：古宮路子
ご協力くださった皆様に御礼申し上げます。

■ 倫理委員会

佐藤 千登勢

「『倫理委員会』に関する内規」（2022年12月改訂）について、改訂案が2024年7月の理事会において承認された。10月の総会に上程される。本委員会が担当する案件は今年度はなかった。

支部活動記録

■ 北海道支部

1. 2024年度研究発表会・総会
(2024年7月6日(土)13:00～ 北海学園大学、対面・Zoomのハイフレックス開催)

◇ 研究発表会

- ・ 伊藤学(北大・院)「近代日本におけるアルツィバースェフ『サーニン』移入をめぐって—寄せられた反応から考察する作品受容の特徴—」(司会:大西郁夫)
- ・ 藤田智子「シャガールのヴィテブスク」(司会:大武由紀子)
- ・ 宮内拓也(北大)「ロシア語名詞句の統語構造の研究:記述的成果を中心に」(司会:鈴木理奈)
- ・ 清沢紫織(北海学園大学)「ベラルーシ語の書記体系の複数性と公共空間における使用実態:ミンスクとヴィリニユスの言語景観から」(司会:菅井健太)

◇ 特別講演

- ・ Роман Кацман (Bar-Ilan University, Hokkaido University) Русскоязычная литература Израиля: между виктимной мелодрамой и критическим национализмом (司会:安達大輔)

◇ 総会

- ・ 議題: 1. 2023年度活動報告(理事会、及び北海道支部)、2. 2023年度会計報告、3. 支部会の研究発表について、4. その他
- ・ 運営委員会(2024年7月6日(土)12時～ 北海学園大学)

◇ 今期の体制

- 支部長:岩原宏子
- 事務局長:菅井健太
- 事務局住所:060-0810 札幌市北区北10条西7丁目 北海道大学文学部 菅井研究室付
Tel:011-706-3050 E-mail: ksugai@let.hokudai.ac.jp

■ 関東東北支部

1. 『関東東北支部報』42号発行(2024年5月)
2. 2024年度研究発表会・総会(2024年6月1日(土)、東京大学本郷キャンパス(対面)とオンライン(Zoom)を併用)

◇ 研究発表会

[修士論文成果報告]

- ・ 梅谷彩香(東大院修了)「銀の時代ロシアのアポロン主義芸術論—アキム・ヴォリンスキー、マクシミリアン・ヴォロージンを中心に」(司会:草野慶子)
- ・ 飯濱碧輝(早大院)「ジュコーフスキ「村の墓場」(1802)におけるエレジーの主体の革新—時空間との関係を中心として」(司会:鳥山祐介)
- ・ 石川顯法(法政大院)「ゴンチャロフ『断崖』研究—苦悩するヴェーラ—」(司会:澤田和彦)
- ・ 栗原かおり(早大院)「マリーナ・ツヴェターエワ「別れ」における詩作のテーマ」(司会:前田和泉)
- ・ 宮將仁(東大院)「ロシア・フォルマリズムと生産主義」(司会:八木君人)
- ・ 安井靖雄(東大院修了)「ソルジェニーツィン『第一圏のなかで』について—スターリンと外交官ヴォロディンの人物像形成を中心に」(司会:越野剛)
- ・ 木田貴久(東大院修了)「アンドレイ・ペールイ

『ペテルブルク』における都市空間についての分析—ドゥートキン屋根裏部屋を中心に—

(司会:松本隆志)

- ・ 山田智子(東大院修了)「初学者ではない L2 ロシア語の語頭無声摩擦音/sj/の音声的特徴」(司会:古賀義顕)
- ・ 若月花帆(東大院)「ロシア語における所有構文の統辞構造について」(司会:堤正典)
- ・ 田中春菜(東大院修了)「BE型言語である現代ロシア語における HAVE 型動詞 иметь の使用範囲」(司会:阿出川修嘉)
- ・ 飯田有季(千葉大院修了)「ヴェレシチャーギン絵画における印象派とジャポニスムの影響—「1812年シリーズ」「ロシア・シリーズ」から「日本シリーズ」へ—」(司会:上野理恵)

[博士論文成果報告]

- ・ 梶彩子(早大院次席研究員・学振特別研究員-PD)「バレエとプラスチックの狭間:20世紀バレエ史における振付家レオニード・ヤコプソンの位置づけ」(司会:斎藤慶子)
- ・ 光井明日香(東大他非常勤講師)「現代ロシア語における性に関する一致をめぐって」(司会:井上幸義)

◇ 総会

① 報告事項

- ・ 2023年度会計報告
- ・ 2023年度支部活動概要:『関東東北支部報』第41号の刊行、2023年6月3日に関東東北支部研究発表会・総会の開催、第1回運営委員会(2023年3月)について報告が行われた。

② 審議事項

- ・ 日本ロシア文学会75周年記念イベント(2025年)に向けた関東東北支部の企画について、講演付き映画上映会などの企画を東北地方で開催することを検討することになった。
3. 運営委員会(2024年3月27日、東京大学本郷キャンパス(対面)とオンライン(Zoom)を併用)
 - ・ 各大学の2024年度のロシア語履修者数の状況や、ロシア語研修の留学先について、情報共有・意見交換が行われた。
 - ・ 支部内の情報共有をスムーズにし、合わせて事務作業の軽減を図るため、支部のメーリングリストの作成やオンライン投票システムの導入について検討することになった。
 - ・ 関東東北支部の運営と日本ロシア文学会75周年事業に向けて支部としての企画について講演付き映画上映会などの企画実施の可能性について検討した。今回のイベントを機に、関東東北支部主催のイベントを東北地方での開催も視野に入れて今後も継続的に行うことを検討していくことが確認された。

4. 今期の体制

- 支部長:楢岡求美
- 事務局長:大森雅子
- 事務局住所:〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33 千葉大学大森雅子研究室
E-mail: kanto.yaar@gmail.com

■ 関西中部支部

1. 2023/2024年度『日本ロシア文学会関西中部支部会報』発行(2023年8月21日刊)
2. 運営委員会(2024年7月14日(日)総会前)

- ・ 総会審議事項に関する事務局案の審議・承認
- ・ 支部の会費・入会費の当面不徴収の継続について審議・承認
- 3. 2024年度研究発表会・総会：2024年7月14日（日）
神戸市外国語大学サテライト（対面）＋オンライン（Zoom）によるハイブリッド開催
- ◇ 研究発表
 - ・ 浅野智夫（阪大院）「ソ連／ロシアの戦勝記念日にみる『物語』：軍事パレード演説テキストの内容分析を中心に」（司会：高橋健一郎）
 - ・ 松山勝哉（神戸外大院）「創作理念としての『生』：クプリーンとプーニンの創作において」（司会：清水俊行）
 - ・ 平寛寛大（神大他（非））「Я.П. コゼルスキーの道徳哲学について：『親がかり』のスタロドゥームの台詞と比較して」（司会：清水俊行）
 - ・ 杉野ゆり（京大院）「プーシキン『青銅の騎士』の作者注より：F. アルガロッチの『ロシア旅行』について」（司会：木寺律子）
 - ・ 宮風耕治「ロシアのオカルト小説の研究に向けて：SF史との関連から」（司会：大平陽一）

◇ 総会

- ①[報告]会員異動 ②[報告]2023年度活動報告 ③[審議]2023年度決算案の審議・承認 ④[審議]2024年度予算案の審議・承認 ⑤[審議]次期支部長および理事候補オンライン選挙費用の2025年度予算事前承認について ⑥[審議]次期選挙管理委員について審議・承認（岡野要（神戸外大）） ⑦[報告]支部の会費・入会費の当面不徴収の継続について ⑧[報告]2025年度研究発表会・総会当番校について（名古屋外国語大学・ハイブリッド開催） ⑨[報告]理事会報告

◇ 今期の体制

支部長：金子百合子
事務局長：藤原潤子
住所：651-2187 神戸市西区学園東町 9-1 神戸市外国語大学藤原潤子研究室 気付
E-mail: junko@inst.kobe-cufs.ac.jp

■ 西日本支部

会員間での日程調整がつかなかったため2024年度研究発表会・総会は延期となった。今後の開催は未定である。

◇ 今期の体制

支部長・事務局長：佐藤正則
事務局住所：〒819-0395 福岡市西区元岡 744 九州大学大学院言語文化研究院佐藤正則研究室気付

日本ロシア文学会 第74回大会資料集
2024年9月26日発行

発行者 日本ロシア文学会 中村唯史
〔書記〕

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8
大阪大学大学院人文学研究科
北井聡子研究室内

〔庶務会計〕

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1
上智大学外国語学部ロシア語学科
秋山真一研究室内

E-mail（共通）：yaar@yaar.jpn.org

URL: <http://yaar.jpn.org/>

〔大会組織委員会〕前田和泉（委員長）、金子百合子、神岡理恵子、寒河江光徳、佐藤正則、武田昭文

〔大会実行委員会〕寒河江光徳（委員長）、江口満、覚張シルビア、梶彩子、北井聡子、草加千鶴、古宮路子、中堀正洋、二宮由美、宮川絹代

◆コーヒーは中性名詞? Гурьянова С. - В начале было кофе. Лингвомифы, речевые «ошибки» и другие поводы поломать копыя в спорах. М.: Эксмо; Бомбора, 2023, 368 стр. (R9945) 税込価格 ¥5,390

◆S・M・トルスターヤ: スラヴ語複合語形成の基礎概論 Толстая С. М. - Синтаксические основы славянского словосложения. Очерки. (Серия: Традиционная духовная культура славян). М.: Индрик, 2023, 232 стр. (R9986) 税込価格 ¥5,390

◆コミックスによるロシア語 文法の難しさ 外国人用参考書 Валева Д. - Русский язык в комиксах. Трудности грамматики. Учебное пособие для иностранных учащихся. (A2 - B1). М.: Русский язык. Курсы, 2024, 152 стр. (S1389) 税込価格 ¥4,400

◆実習ロシア語文法 (B1水準) Латышева, А. Н. - Русская практическая грамматика. Уровень B1. СПб.: Златоуст, 2023, 340 стр. (R9943) 税込価格 ¥6,380

◆何でも話題にできるロシア語 会話上達のための教科書 (B1-B2水準) Яркина Л. П., Пугачев И. А - Разговоры обо всём: Учебное пособие по развитию речи. (Уровень B1, B2). М.: Русский язык. Курсы, 2024, 264 стр. (S0776) 税込価格 ¥5,060

◆ロシア語の複雑さは苦手ですか 正しく書く方法を簡単に教えます Шадрина А. - Кто боится сложностей русского языка? Простые объяснения для всех, кто хочет писать грамотно. М.: Манн, Иванов и Фербер, 2023, 168 стр. (R9121) 税込価格 ¥5,390

◆モスクワ文学アトラス 18-21世紀作家・詩人・批評家を記念する8000の名所案内 Недошивин В. М. - Атлас. Литературная Москва. Домовая книга русской словесности, или 8000 адресов прозаиков, поэтов и критиков (XVIII-XXI вв.). (Проза Вячеслава Недошивина). М.: АСТ, 2023, 736 стр. (S0116) 税込価格 ¥8,140

◆ロシアと在外ロシア 作家・詩人・学者・画家 Бонгард-Левин Г. М. - Россия и Русское Зарубежье: Писатели. Поэты. Ученые. Художники. М.: Наука, 2024, 638 стр. (S1810) 税込価格 ¥14,300

◆チホミーロフ: 『白夜』から『カラマーゾフの兄弟』まで ドストエフスキー論 Тихомиров Б. - От "Белых ночей" до "Братьев Карамазовых". Статьи о Достоевском. М.: Серебряный век, 2023, 456 стр. (R8982) 税込価格 ¥9,020

◆プシュケー マリーナ・ツヴェターエヴァの生涯のフォトクロニクル Шаинян Н. Б. - Психея. Фотолетопись жизни Марины Цветаевой. М.: Бослен, 2024, 320 стр. (S0908) 税込価格 ¥8,580

◆ヴァルヴァーラ・ステパーノヴァ: 手紙、詩の試作、手記 Степанова В. - Человек не может жить без чуда. Письма, поэтические опыты и записки художницы Варвары Степановой. М.: Ад Маргинем Пресс, 2024, 384 стр. (S0338) 税込価格 ¥5,720

◆アヴァンギャルドのアドレス モスクワ中心部 Геташвили Н. В. - Адреса авангарда. Москва. Центр. М.: Еврейский музей и центр толерантности, 2023, 300 стр. (S0414) 税込価格 ¥15,400

日ソのホームページ(<http://www.nisso.net>)ではロシアの新刊書、新聞・雑誌、美術アルバムのコーナーの他に、約80,000点のロシアの書籍のキーワード検索が可能です

(株)日ソ

東京・大阪・モスクワ

〒113-0033 東京都文京区本郷3-15-4本郷小林ビル
Tel.03-3811-6481 Fax03-3811-5160
E-Mail: nisso@nisso.net

アカデミー版 A・N・トルストイ全集
作品篇 全13巻 第1巻 1900~
1910年 中・短編集、長編「奇人たち」
Толстой А.Н. - Полное собрание
сочинений. Художественные
произведения. В 13 т. Т.1. Повести и
рассказы. Роман «Чудаки».

М., Ин-т мировой литературы им.Горького
РАН. 2024. 871 с. R259731-8543 ¥9,240
★全巻セットでのご注文をおすすめいたします。

ロシアの文学博物館百科事典全2巻
Наши Литературные музеи
России. Энциклопедия. В 2 т.

М., ГМИРЛИ им. Даля.
Т.1. А-Л. 2024. 638 с. R241801 ¥18,040
Т.2. М-Я. 2024. 740 с. R256773 ¥16,280
★第2巻刊行・完結!

ナウカ・ジャパン

店舗 10:00-19:00(月~金)
11:00-18:00(土)、日祝休

銀の時代 19~20世紀交替期の文化的
英雄の肖像ギャラリー 全3巻

Серебряный век. Портретная галерея
культурных героев рубежа XIX-XX в. В 3 т.
М., «Т8 RUGRAM». 2024 г.

Т.1. А-И. 568 с. R256943 ¥15,510
Т.2. К-Р. 636 с. R256907 ¥16,170
Т.3. С-Я. 518 с. R256944 ¥17,050

★人物事典 第3巻刊行・完結!

スクヴォルツォフ ロシア語詳解大辞典全3巻
Скворцов Л.И. Большой
толково-объяснительный словарь
русского языка В 3 т.

М., «Мир и образование». 2023. 2512 с. R256972
Т.1. А-Й. Т.2. К-О. Т.3. П-Я ¥28,270
★規範辞典「オジェゴフの辞典」を発展させた21世紀の露露辞典。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
TEL 03-3219-0155, FAX 03-3219-0158
book@naukajapan.jp
<https://www.naukajapan.jp>